

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

も う

M・O・H通信

M·O·H communication

特集：可能性「未来予想」

31号

2011

Spring





「ウエディングドレス」 2011年 クレープ生地に柿渋染め



「宙(そら)」 2011年

山本 玄匠

「柿渋手描き染め」染織家
1940年鳥取市生まれ。滋賀県高島市在住。60歳まで染色の現場で働き、数々の会社を再建。独立後「山本工房」を構える。
柿渋手描き染めが三宅一生に認められ、パリコレクショントップモデルのナオミ・キャンベルに着用され世界的に認められる。2002年、脳卒中のため左手足が不自由に。しかしその後、不思議と求めている色味が出せるようになり、溢れるようにどんどんアイデアが浮かぶ。出すことが不可能と言われた柿渋での鮮やかな赤や黄・オレンジなどの色味を表現することに成功した。
連絡先/TEL.090-9053-0451



「M・O・H」のマーク＝牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★M・O・H通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

- M** → **循環** もったいない 他人的生命を奪って得たものを使わせて頂く
- O** → **共生** おかげさま 人は一人では生きられない、環境によって生かされている
- H** → **抑制** ほどほどに 欲はほどほどに、良い環境を作り上げるために

contents

目次

特集「可能性」— 未来予想

M・O・H対談 小さなことはいいことだ ローカルからはじめよう

「大切にしたい会社」に学ぶ、可能性の在処 坂本 光司 & 森 建司 …… 5

M・O・Hレポート 湖国の若手の「心」を覗いた写真家

若手農業家に未来と希望を MOTOKO …… 13

インターナショナルメッセージ独逸

食料品汚染から学ぶ地元への愛 原 修子 …… 22

滋賀の魅力応援カタログ …… 23

寄稿

建築家マイケル・レイノルズの家を訪ねて 清水 陽介 …… 41

愛する風景

いきとしいけるもの 畑 裕子 …… 47

漫画

「山暮らし子育て日記」 オノ ミユキ …… 49

日本の精神

「日本」について学ぼうその五 井上 昌幸 …… 51

商家の家訓の話 第16回

野田六左衛門家の系譜と押込め隠居 末永 國紀 …… 53

真勝寺の内陣を飾る

中川さんの力作、湖北の花浄土 …… 55

里のお話

早春の伊吹野 三山 元暎 …… 56

環人会ツアーVol.15

彦根市 高宮町・石寺町・日夏町 …… 57

アメニティーフォーラム15 アール・ブリュット・ジャポネ凱旋展

パリに行った作家たち …… 61

講演日記 …… 63

本の紹介 …… 64

M・O・Hニュース …… 65

M・O・Hせんりゅう、手話コーナー

いいものみつけた、観音さん

参加しました

イベント紹介 …… 68

通信概要 …… 69

読者の声 …… 70

表紙写真

辻村耕司

東近江市上平木の春祭で
燃え落ちる大松明の間を
駆け抜ける「御託宣」

■可能性 —「未来予想」

滋賀の里山を体験できる「山里暮らし交房
風結い(かざゆい)」オープニングイベント
では楽農舎の卵が販売されました。

大方の産業の成否は消費者が鍵を握っている。消費者が需要を支えなければ市場は成り立たない。

しかし消費者の判断基準には、多くの社会常識が影響していて、消費者個人が自立した判断で、本当に必要なものだけを買っているかという怪しい面が多い。

現代の購買の判断基準は圧倒的に、「低価格志向」である。消費財のみならず経済界全体を見渡してもそうだ。勿論これは不況にな

ると出てくるデフレ現象とは別の問題で、スタートは量販店などの低

価格競争の結果が、購買心理に強く働きかけて出来たものだろう。それは今でも日常的に、低価格の魅力を伝える広告が圧倒していて、その広告を見るものに、思わず各店舗の価格差に対する興味をそそる仕掛けになっている。

これは経済の原則で、抗し難いものだと言う見方が全体を占めている。経済界全体の、そして世界の常識としても一般化されている。その結果、生産、

流通を含め供給サイトは、低価格を求めて地球上を駆け回り、最も低価格な供給源を見つけて市場を独占しようとしているのだ。

わが国も産業の空洞化が言われ始めているが、いま店舗で日用品などを見ると殆どが輸入品である。産業の空洞化は国内需要の消費に限界が見え、需要のある海外に工場移転をしている企業が多い事もあるが、いずれにしても、

それはわが国の雇用や景気に悪影響を与えている事は間違いない。

消費者には購買の自由があり、何処の国の製品を買う事も許されている。

しかし、消費者といえども生産労働に関わっていることを忘れず、輸入品ばかりを買うことは慎まなければならぬ、ことに気が付かなければ成らない時なのだ。今わが国の経済はやや回復気味というものの、雇用は一向に進まず、

失業者は溢れている。産業の空洞化は尚一層この傾向に拍車をかけることになるのだ。

昨今TPPの加盟問題で、特に農業にとつて重大な影響をもたらすものではないかと議論されている。国全体の経済効果の観点からおそらく加盟する事になるのだろうが、関税なしで廉価な輸入商品に、消費者が一段と飛びつくような事があると、農業を始め国内産業が

消費者が守り育てる国内産業

森 建司

を決定的なダメージを受ける事になりかねない。

この危機を救う事が出来るのは、

正に消費者の購買意識の変革しかない。消費者が、自分の家族や周辺の人たちが働く職場を守り、地域を守り、日本経済を守り育てるのは、自分の購買動機に掛かっていることに気付くべきなのだ。

その購買動機とは「地産地消」であり「出来る限り国産品しか買わない」意識である。国内産業は消費者である自分たちが守り育てるのだ、という強い郷土愛、国家愛が必要だ。



●対談

坂本 光司

法政大学大学院政策創造研究科
教授

森 建司

循環型社会システム研究所 代表

〈可能性「未来予想」— ①〉

「大切にしたい会社」に 学ぶ、可能性の在処^{ありか} 小さなことはいいことだ ローカルからはじめよう

2008年春に出版された『日本でいちばん大切にしたい会社』は、泣けるビジネス書、人に教えたい本と口コミで全国に広がり、本の中で紹介された[※]日本理化学工業の経営のあり方が、2009年10月の鳩山前首相の所信表明演説でも取り上げられました。

大切にしたい会社とは何を使命とし、責任とするのでしょうか。著者の坂本光司さんを迎え、森代表とともに語っていただきました。

※日本理化学工業株式会社……全従業員の7割以上が知的障がい者のチョーク製造会社。昭和35年より重度障がい者の雇用にチャレンジ。ダストレスチョークで国内トップシェアを誇る。

■ 新江州株式会社 本社／長浜市

■ 2011年1月

**大企業と中小企業は、
生きる世界が違う**

森 先生のご専門は中小企業経営論でいらっしやいますね。実は非常に驚いたのです。そんな分野の学問があったのかと。

坂本 私が勝手に作ったようなものです（笑）。そもそも大企業と中小企業を同じ物差しで見ること自体に無理があると思われませんか。

森 まったくそのとおりです。

坂本 問題は、大企業と中小企業をこれまでずっと格差論で論じてきた経営学にあると思います。私が思うに両者の最大の違いは、規模ではなく、生きる世界が違うということです。それこそ、川で生きるか海で生きるかぐらいに違うと思います。それを同じ世界で生きようとするから、おかしなことになるのです。

森 その原因として、コンサルティングのもたらす害というのも一理あると思うのです。彼らは大企業の経営学ばかり教えますから。

坂本 もっと言えば、大学の先生だってそうです。

森 そうでした（笑）。中小企業経営学というものは、はなから存在しないという考えなのでしょうね。

坂本 教えるにしても大企業経営学はある意味、管理学ですから、楽なのです。しかし、中小企業経営学はそうではない。言ってみれば浪花節なわけです。これを言語化したり理論化したりするのはなかなか難しいことで、しかもその本質は“現場の積み重ね”ですから、調査、研究するにも大変な作業になります。

森 肌で感じとってもらいたくない「微一」の部分が大きいですからね。それも含め、この齢になりますと、そろそろ近江商人でいうところの「家訓」を書き始めようかという心境になります。それで、これまでを振り返って何を言うべきかを考えますと、結局は本業はもちろん大切だけれど、社員一人一人に対して、地域の一員としての役割もきちんと果たしなさいよと、それに引き着くのです。それから考えても、大企業

と中小企業では企業活動の目的が違うということを感じます。向こうにとってはグローバルが当たり前でも、こちらはローカルが大切なのです。

坂本 大企業がマスマーケットであるならば、中小企業は顔の見える、または隙間マーケットです。ですから中小企業が大ロットのものでなければ受注しないと開発しないというのはおかしな話で、自らの存在基盤そのものを無視することになります。しかしこれまでの経営学では、中小企業を大企業にすることが目的のような施策が行われ、経営に対するコンサルティングもそうした側面が凄く大きかったと思います。しかも、それを鵜呑みにすると、見るも哀れな結果に至るわけです。やはり大企業とは違った独立独歩のことをされている会社が、次第に世の評価を受けるといふ流れを引き寄せないと。それが私の思いです。

**企業の最大の商品は、
社員“である”**

◇「日本でいちばん大切にしたい会社」より抜粋

——本当の企業経営とは「五人に対する使命と責任を果たすための活動のこと」であると定義し、使命と責任とは「幸福の追求」「幸福の実現」であると書きました。

五人とは、次の人々のことです。

- 一、社員とその家族
- 二、社外社員（下請け・協力会社の社員）とその家族
- 三、現在顧客と未来顧客
- 四、地域住民、とりわけ障がい者や高齢者
- 五、株主・出資者・関係機関

森 先生は本の中でも、はじめの四人とりわけ「社員とその家族」に対する使命と責任を強調されていますね。

坂本 ええ。五人目の人たちは、会社の業績が上がれば結果、幸せがもたらされるという人たちです。ですから私としては、書かなくてもよいのだけけれど、とりあえず書いた、という感じで

す（笑）。私は、四人目までの人たちが幸せだと思いうことができれば、間違いなくその会社の業績は上がると思います。逆にその人たちが、幸せを実感できない組織体であるならば、その会社は赤字、もしくは倒産にまで追い込まれるだろうと思います。

「電話対応で組織風土は、だいたいわかるのですよ」坂本氏

森 中小企業は固定客が相手ですから、お客様の顔がよく見えるかわりに、皆様からも社長以下、社員一人一人の顔がよく見えると思います。それだけに人格や人徳が、会社の信用・信頼につながります。

坂本 おっしゃるとおりです。私も年間で150社程度の企業を、現地研究のために訪れます。事前のアポイント



メントは必ず自分で電話をかけてお願いです。ですが、メールで済まさないのは、そこから既に私なりの見方が始まっているからです。その際の電話のやり取りで、はっきり言ってその会社の組織風土の半分以上はわかります。

森 いや怖いですね。

坂本 しかし、その怖さをわかっておられない会社も多いですよ。「何のために来るのですか」とか「社長はいつ帰っ

てくるかわからない」とか、考えられないような応対も少なくありません。

電話をした上で、やはり訪れるのはやめにしようと、そういう会社もあります。特に今は、お話の中でアドバイスをさせていただく方の分量が増えていきます。もちろん私はコンサルタントではなく、ただ四人のためにという思いで動いているのです。ですから乱暴な言い方をしますと、わざわざ会ってなにも損をすることはないので。研修会等でも、自分の会社のことを非常に格好良く語られる社長は沢山おられますし、「うちの会社にもぜひ」と誘われることは多々あります。しかし、社長の生き方や心の持ち方、その背中というのは必ず鏡として社員にうつていきますから、社員の一挙手一投足を見れば、透けてしまうものなのです。そういう意味で、今日こちらの会社にお伺いして、非常にぬくもりを感じました。

森 ありがとうございます。

坂本 一番大切なことだと思えます。

企業の最大の商品は、「社員」ですから。顧客は商品よりむしろ、その会社の社風で

あるとか、社員の人柄を見て購入等の判断をしています。

モチベーションを高めるのは競争か？ 共生か？

森 例えば教育改革の中でも、理系特化で人材を育成し、国際競争力を強化するといった風潮があります。もちろん、そうした人材の育成も大切ですが、一方で地域を守る人材を育てることも忘れてはならないと思います。

私思うに、地域の伝統や文化を次代につなげ、地域の基盤となる人材に必要なのは、「世渡り」の力ではないでしょうか。ところが今の子どもたちを見ていますと、塾や習い事などで

「企業は地域を守る人材育成も忘れないで」森氏

く忙しい。競争に勝つためのトレーニングに追われ、世渡りというものをほとんど知りません。競争するからこそ人は伸びる、と言う人もいますが、私はむしろ社会の中で、信用される、正直になる、感謝するといったような世渡りの力を鍛え、共生の社会を築いた方が、極端な豊かさは無いにしろ皆が幸せになれると思うのです。しかし、それでは人はやる気を失うものなのでしょうか。



坂本 いえ、私の経営学も競争ではなく共生に基づいています。つまり、誰も犠牲にしない、喜びも悲しみも苦しみもともに分かち合う経営です。競争がモチベーションを上げるというのは、私に言わせればとんでもない話です。私自身、モチベーションについての研究を二年かけて行いましたが、その結果、社員のモチベーションが下がる最大の要因は、給与や評価ではありません。所属する組織の上司や経営者に対する「不信任」なのです。逆に考えると、上司やトップの「人格・識見・能力」が、社員のモチベーションになるという事です。私はこれまで六五〇〇社を訪問調査してきましたが、人事制度という年功序列に軸足を置いた会社が多いのです。成果主義は競争社会そのもので、年功序列は共生社会に通じるものがあります。例えば五つ歳の違う人が逆転人事で地位もボーナスも上だとしたら、競争社会の名の下では正しいことかもしれません。一人の人間として考えた場合、どうでしょう。もし親が、兄弟の間でそうした扱いを

したら、これはもうおかしなことになるでしょうね。

森 ならないほうがおかしいですよ。

坂本 成果や業績で賃金等の差をつけない会社は沢山あります。そういった会社でおかしくなったところは、これまで調査した中ありません。むしろ、成果主義を極端に導入しておかしくなった会社は山ほどあります。なぜなら、やっつけない内輪の競争が始まるからです。「ボーナスが二倍違う同僚が留守の時、その同僚にかかってきたお客様の電話に、親切に対応する社員がいるはずない」というのが私の持論です。ですから私は、極度の年功主義論者なのです。それで、もし成果によって差をつけるなら、匙加減でと申し上げています。

森 妬みや嫉妬も競争心から出てくるのですからね。

■ 真の強者と偽物の強者

森 先生は本の中で、障がい者や高齢者をあえて「弱者」とし、健常者を「強

者」とされていますね。自分は強者であるという責任を、あらためて問われた読者も多かったのではと思います。

坂本 私は強者には二つのタイプがあると思うのです。真の強者は心が熱く豊かで、弱者にやさしい。そして、利他の心を持っています。不況になると、経営者ばかりか社員の心までが顕在化する。私は思っていて、だから時々不況になった方がいいということを書きました。つまり、不況になると、偽物の強者はまずリストラをします。真の強者は皆で苦しみを分かち合い、全員の給与を引き下げます。そんな正しい経営者の中でも、社員の中に“なぜ自分は頑張っているのに、何もしていない連中と同じように給与を減らさなければならないのだ”と、偽物の強者が出てくるかもしれません。私が思うに、そうした社員にこそ、会社を辞めてもらうべきなのです。

森 何が正しくて、何が正しくないのか。競争に煽られ、見失っているものがありますね。



「不信任感が社員のモチベーションを下げる」坂本氏

坂本 競争が悪いとは言いませんが、

過度な競争は否定すべきだと思います。

もし、同じ職場の同期で、一人は両親ともピンピンしていて、いまだ現役の勤め人で、妻子も健康だと。しかしもう一人は病気の両親を抱えていて、家族の中に障がいのある者もいると。その二人がまったく同じ条件で仕事ができますか？手当て等で解決できますか？自分も彼の同期だとしたら、彼の境遇に後ろ髪を引かれずに働くことができるか。彼と比べて勝った、負けたと

言うことができるか。これはもう考えずともわかりますよね。ですから私は、経営者の方に年功序列をベースにして、匙加減で成果主義を取り入れてくださいと申し上げるのです。全社員の能力を、足し算ではなく掛け算で引き出すのは、社員の仲間意識や家族意識です。特に中小企業の場合、そうした大家族的経営を考えるほうが正しいし、自然だと思っています。

森 私も賛成です。これは、農耕民族であった我々日本人独特の経営だと

思います。

坂本 しかし二

十年ほど前から、おかしな方向に行ってしまったっています。効率ありき、競争ありき、科学一辺倒の考え方が幅を利かせ、非常にトゲトゲした会社になってしまいました。日本

の会社は、海外に真似のできない部分を失ってしまった、その結果、強者の心も痛めてしまったし、弱者の心はもっと痛めてしまったのではないのでしょうか。ここを元に戻さない限り、この国の再生は難しいというのが私の考えです。

森 私が一番押しからんと思うのは、人件費を極端に抑えて、やれ効率だ、やれトップの経営能力だ。それでトップの報酬は数億円だというような話を聞いても、寒々しいだけです。

坂本 自分の命や財産をかけて会社を経営しているのだから、何の文句を言われる筋合いもないという人もいます。

しかし企業は、存在した瞬間から「社会的公器」なのです。自分たちが使っている空気や水や土地、そのどれもが周りに何らかの影響を与えているのです。まして他人を雇用するとなれば、これは社会的公器そのものです。私はよく、「外部から干渉されるのが嫌ならば、他人を雇わずに家族だけで仕事をなささい。会社を大きくしようなど考えてはいけません」と、こう申し上げているのです。

「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞創設

森 先生のお話をお聞きしていると、これはまさに「思想」だという気がします。中小企業だからこそその経営学をつくる思想が輪のように広がっていけば、この国はもう一度、再生できるのではないのでしょうか。そのために何かできればと、切に思っています。

坂本 実はとうとう「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞が、昨年に創設されました(※第一回大賞への応募は締め切られました)。誰も犠牲にしない、そして五人を大切にすることを国民運動として、私自身が中心となって国に働きかけました。主催は法政大学、日刊工業新聞社、あさ出版で、この三者が実行委員会も務めます。首相官邸も訪れ、主旨を説明させていただいたのですが、担当官がどれぐらいの予算をつけるべきかと聞かれました。それで私は、「国の予算は一円もいりません。この賞にまわす予算があるなら、それ

はすべて福祉にまわしてください」と申し上げておきました。時代が変わったのですよ。

森 この賞が、日本の経営者の頭を変えられるかもしれません。

坂本 審査基準も私がつくりました。それに該当するような美しい会社は無いのではありませんか、と言われる方もありますが、私はこれまでにそうした会社をたくさん見てきましたから。講演会でもよく、「この世に神様のいるごとく」という話をするのですが、正しい会社が滅びるのなら、この世は無いらしいのです。しかし、正しい会社は徒党を組みませんから、その声はなかなか社会に届きません。

森 そこを汲み上げていこうというのですね。第一回の発表(※3月末日発表予定)が今から待ち遠しくあります。先生のお話や本に書かれたことは、我々中小企業にとってバイブルです。私の前に「お客様だけが神様ではない」と本誌に書いたのですが、それは供給側の存在を、供給者自らがいないがしろにしているのではないかとという疑問を持つ

たからです。私に言わせれば、供給者だつて神様です。そうしたことを我々はなぜ忘れてしまうのか、先生のお話をお聞きしながら身の引き締まる思いでした。本日は誠にありがとうございます。

坂本 こちらこそありがとうございます。した。



「日本でいちばん大切にしたい会社大賞」チラシ④、ベストセラーの著作⑤、最新刊「経営者の手帳」⑥

会社に。

四代目社長・草野勉 新たな経営理念のもと 飛躍を目指す。



人を大切に

平成十五年、草野勉が四代目社長に就任。
新たな経営理念のもと、魅力ある企業への発展と、
豊かな未来社会を目指し
NTTグループの新たな挑戦が始まる。

「人を大切にが基本です」坂本氏[㊟]と森氏[㊤](eプラザにて)

『経営者の手帳』(あさ出版) 『日本では
ちばん大切にしたい会社?』(あさ出版)

- 2010年
- 近著

● さかもと こうじ 1947年静岡県
生まれ。1970年法政大学経営学部卒
業。福井県立大学教授・浜松大学教授・
静岡文化芸術大学教授等を経て、200
8年4月より法政大学大学院政策創造研
究科(地域づくり大学院)教授および法
政大学大学院静岡サテライトキャンパス
長、同大学院イノベーション・マネジ
メント研究科(MBA)兼任教授。ほかに
国・県・市町や商工会議所等団体の審議
会や委員会の委員を多数兼務。専門は中
小企業経営論・地域経済論・福祉産業論。
著書の『日本ではちばん大切にしたい会
社』は、現在シリーズ累計で50万部を突
破するベストセラー。

誠実に生きる。
信じて生きる。
利他の心を胸に生きる
2011.1.12
坂本氏

● もり けんじ 1936年滋賀生まれ。
滋賀県立長浜北高校卒業。新江州(株)
代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹
事。滋賀経済産業協会相談役など。
著書『吃音はななる』遊タイム出版、
『循環型社会入門』新風舎、『中小企業
にしかできない持続可能型社会の企業経
営』サンライズ出版。

勇気凛々
いの壁を打ち破れ
森 建司

● 「日本でいちばん大切にしたい会社」
大賞公式HP
<http://www.taiseitu-taisyo.com>

「ちっちゃいけど、世界一誇りにしたい
会社」(ダイヤモンド社) 『弱者にや
さしい会社の話』(近代セールズ社)
● 2009年
『ケーススタディこの商店街に学べ!』
編著(同友館) 『なぜこの会社はモチベ
ーションが高いのか』(商業界)
● 2008年
『日本でいちばん大切にしたい会社』(あ
さ出版) 『中国義烏ビジネス事情』編著
(同友館) 2008年(など)

若手農業家に 未来と希望を



MOTOKO

写真家

湖国の若手農業家の「心」を覗いた 写真家MOTOKOさん

東京を中心に幅広い領域で活躍する写真家MOTOKOさん。2002年から本格的に滋賀での撮影を始め、新幹線の車窓からずっと心惹かれていたという田園風景の作品を発表し続けてきました。その延長で知り合った二人の若手農業家と、その仲間たち。いつしかMOTOKOさんは、彼らの頼れる姉貴分として、これまで誰も考えなかった新しい「農」のスタイルを、彼らと一緒に創り始めました。

■写真/MOTOKO

■聞き手/辻村琴美（本誌編集長）

■大阪市中央区西心斎橋「digeout ART & DINER」

■2011年2月6日



滋賀から運ばれた白大根と赤大根

●この日のイベント……

2月3日から20日にかけて、コネファ(※滋賀県の湖北で農業を営む青年農業者組織、湖北ニューファーマーズの通称)とディグミニアウト(※本文参照)のコラボイベントとして、アメリカ村のカフェを会場に開催された「農家アート祭」。

”農と人をつなぐ“をスローガンに、農家アートの展示やマルシェを開催。

取材した6日は、コネファメンバーとMOTOKOさん、イラストレーターのチャンキー松本さん、danny(ダンニー)さん、写真家の桑島薫さんらによる「農家トーク」をはじめ、コネファ持参の冬野菜と母を使った特別メニュー&デザート「ごちそう」の提

供などが行われ、大勢の若者たちで賑わいました。

●滋賀で進行中「田園トリムプロジェクト」

MOTOKOさんを発起人として始まった農業の未来を考えるプロジェクト。一次産業の後継者たちは、この国の食料自給率を支えるだけでなく、生態系の番人としても大きな役割を担います。このプロジェクトでは滋賀県の若手農家たちと意見を交わしながら、「米づくり」を次世代に伝えるための方策を探ることを目的とします。



ディグミニアウトの入り口、中は大きな空間

① 近江ええぞ節で盛り上がる ② チャンキーさんの切り絵はすごい ③ Konefa マルシェのメニュー ④ マルシェにはたくさんのお客様が ⑤ 搦きたてのお餅でつくるイチゴ大福



「やってもしやあない」が口癖 だった湖北の農業青年たち

辻村 MOTOKOさんが湖国の若手農業家を撮られるようになったのは2008年からだそうですね。高島市新旭町針江の石津大輔さんや、長浜市湖北町丁野の家倉敬和さん。お二人とも爽やかな好青年で、希望と自信に満ち溢れて見えますが、最初の印象はそうではなかったとか？

MOTOKO 2000年以降、仕事で地方に行くようになり、その衰退が深刻になっていくことを知りました。もともと地方の現実を見てみようと思ったのが滋賀に通い始めたきっかけです。最初は風景を見ていただけだったので、その里山を背負っていく一次産業の人とお会いしてみたい、と思うようになりました。

石津さんは、かつて大阪でファッションの仕事をした後、農業をするためにご自身で、「選んで」地元に戻ってこられた経緯があるので、すでにビジョンが確立されていました。しかし大学

卒業と同時に就農をされた家倉さんは、私が出会った当時、「農業をする」ことに対してまだまだ葛藤があったのではと思います。無農薬栽培を始めたariして、彼なりに頑張っておられたのですが……。未来に対して途方にくれているような印象を受けました。

辻村 後に出会われたコネファのメンバーも、初めは「しやあない」が口癖だったとか。しかし、地方と農を取り巻く現状を思うと、私などはついその口癖に納得してしまうのですが。

MOTOKO さまざまな地方や農村の衰退を見てきました。滋賀県は可能性も未来もあると思っています。理由は一次産業に従事している若者の多さ。これに尽きる。コネファのメンバーと出会ったときも、皆が20代、30代にと若く、それぞれに農業技術もしつかりとしている。何より大勢の仲間に恵まれ、おまけに長浜は、名古屋や大阪からのアクセスも良い。はつきりいってここは天国のようだと思います。それなのに彼らの口から否定的な言葉しか出ないのは、彼らが自分たちの悪いと

ころしか見ていなかったせいだと思います。話を聞くと、やはり彼らは農村や農業という生業に対してコンプレックスを持っているようでした。そして、問題が起きた場合、自分たちだけで解決しなければならぬと頑なに考えている。だから、「やっても無理」はやめようよ」「違うことを考えよう」という話から始めました。彼らにとつて必要なのは、一旦農村から離れて、外から自分たちの置かれた状況を見たり、都市の人と交流したりすることで、農業の悪いところばかりじゃなく、良いところを見つかることだったんです。

辻村 農村を離れて都市へ出よという発想は多分、中からは出てこないでしょうね。

MOTOKO 私がやってきたことは、農村と都市のコラボ。農村の問題を自分たちだけで解決するのではなく、都市とタッグを組むことで、新たなアイデアや解決法が見えてくる。農村にとつて都市は「鏡」のような存在なんです。相反する対象だからこそ、自分の姿を映すことができる。鏡をじつとの



ぞくことで、自分のチャームポイントを見つけることができるのではないのでしょうか。当然、都市も農村から多くを学べます。農村と都市は永年分断されてきましたが、いまこそお互いに交換し合う時期だと思います。

辻村 なるほど。そこまで踏み込んで、



彼らに手を差し伸べようと思われたのはなぜだったのですか。

MOTOKO 差し伸べるなんてとんでもない。初めて家倉さんを取材した時、私は自分の仕事が恥ずかしいと思いました。帰りの道すがら、同行したライタートと、「自分たちのやっていること

① 農家アート祭の最終打ち合わせ ② 丹精込めた商品を丁寧に並べます ③ コネファマルシェ隊、吉田さん(米農家)吉安さん(イチゴ農家)

て) いらない仕事だね」と、こぼしあったのを覚えています。私たちの仕事は、他人の輝で相撲をとるようなもの。それに比べ、家倉さんたち若手農業者が、どれだけのものを背負っているか。でも、だからといって自分も農業に飛び込むわけにはいかない。自分にできるのは、私を知る限りの人間関係を彼らに紹介して、その新しい出会いの中で彼らが「農業」という仕事や滋賀の物産のアピールの方法に気づいてもらうしかないのです。反対に言えば、都市圏の20代や30代にどうやってコミットするか。彼らの存在に「気づかせる」からです。

辻村 そうですね、都市圏の若者にとっても彼らは「鏡」になりうるのですね。

一次、二次産業へ傾倒しつつある時流にのって

MOTOKO 家倉さんや石津さんに出会った頃って、ちょうど都市の人たちが里山だとか、田舎での自然体験に目を向け始めた時期と重なるんです。

雑誌の世界でも、職人の仕事や手仕事といった一次、二次産業の特集をされていきました。ちょうど「タイムイング」だったんだと思います。それで、関西圏最大手であるエルマガジン社のタウン誌「ミーツ・リージョンナル」に若手農家の特集を組んでくれないかと相談を持ちかけました。

辻村 実際、2009年の7月に発売された『滋賀のABC』では、石津さん、家倉さんらの記事が巻頭部分で紹介され、非常に滋賀らしさを感じました。景色の美しさはもちろん、その景色を守るのは彼らのような存在であると、写真の持つメッセージ力って凄いな、と思いました。

MOTOKO ありがとうございます。

梅田を歩く若者に、農家の友人はいますかと聞いても、そんな人は滅多にいません。でも、現に同世代の若者がこの写真の場所でお米を作っているんだよと、そのことを伝えたいとプレゼンした結果が、あの特集でした。そして、ここからは雑誌作りに関わる人のつながりで、大阪を拠点とするクリエイティブ

集団の「graf(グラフ)」や、ラジオ局「FM802」のアートプロジェクトである「digmeout(ディグミアウト)」のメンバーたちが、友だちとして、時にはサポーターとしてコネファへの協力体制を整えてくれました。大阪人の彼らの義理堅さや人の良さ、お金が無いなら身体を使い、といった気概は、真面目で控え目なところのある滋賀の人に、びったりじゃないかと私は思っているんです。

辻村 そこからMOTOKOさんは、コネファのメンバーに大きなステージを用意されましたね。2009年の12月に京都精華大学と、元・立誠小学校で開催された嘉田由紀子滋賀県知事と石津さん、家倉さんらによるトークイベントを経て、昨年11月に米原市・伊吹薬草の里文化センターで「農家フェス」を開催されました。県内の農業青年グループも巻き込んで、「農家直送マルシェ」や「大地のレストラン」の運営など、名前だけでも美味しそうです(笑)。コネファの皆さんにとっては、非常に大きなチャレンジだったと思うのですが。

MOTOKO 彼らにすればわからないことだらけで、私も随分と口を挟んだし、もしかしたら怒鳴りっぱなしだったかもしれない(笑)。

農家フェスに関してはコネファメンバーの川瀬さんの功績が大きいです。彼も若手農家にステージが必要だと思っておられた。そして一個人の自主イベントに若手後継者がこれだけ集結することは前代未聞の「事件」だったと思います。

フェスをやるうといきさつはいろいろあるのですが、一番の理由は、どれだけ会を重ねても関心を持ってくれるのは都市の非農家の方々ばかり。当事者である「農家さん」には全くといっていいほど届かない。これでは問題解決に繋がらない、と思ったからです。だから川瀬さんからコネファメンバーに働きかけていただいて、県内の若手後継者を集めていただきました。彼らに気づいてもらいたかったんです、みんな収穫を祝って喜びを共有することがどれだけ来年への活力になるかというこを。



①ステージはコンサートや餅搗きで盛り上がり ②みんなで歌って踊れる「近江ええぞ節」をお披露目 ③県内各地からの農産物を販売 ④参加メンバーのお米で造られた日本酒も

辻村 それについてMOTTO K Oさん は、一人勝ちの農業ではないという ことを、よく おっしゃっていますね。
MOTTO K O もともとは 石津さんの言葉なんです。 農村の場合、 地域全体の繁栄に繋がらない ことには意味がない。これはT P P問題に農家は どう向き合えば いいのかという ことにもかわってくる と思います。

わたしは、個人のスキルのみならず全体、地域や県のみならず「国」ブランドとしての団結が必要なのだと思います。サッカーの日本代表と似ていると思うのですよ。2大会前のW杯では、個人の能力は高いにもかかわらず、チームとしてはバラバラでした。俺が俺が、で、団結力に欠けていた。でも、今の代表は団結することを覚えたから、チーム力で勝利しましたよね。それをコネファのメンバーに話したら、「農業者はそれぞれが一国の主だから、まとまるのが難しい。でも、今それやらなあかんと思う」と返してくれたので、それならよしやろうと(笑)。

農業の切り口を 楽しく変えてみる

辻村 今回の「農家アート祭」は、農業の切り口を若者やカルチャーに変えると、こんな楽しみ方ができるのかと発見の連続なのですが、MOTTO K Oさんは一体どんな風な発想でこのイベントを企画されたのでしょうか。



MOTOKO 今回のイベントは、普段、農業に興味も関心のない都市の若者に「農」を知っていただく仕掛けです。物産展や即売会ではめったに見かけない20代、30代の若者に足を運んでもらうため、逆に彼らがよく集うような場所を会場に選びました。分野の異なる同世代が集まった時、彼らが何でつながるかといえば、それは「ものづくり」への共感や、自分は絵を描いている、自分は米を作っているといった仲間意識です。そんなふうにつながったほうが、結び目は強いんです。

辻村 コネファの皆さんは、そうした考え方をすぐに理解できたようでしたか。

MOTOKO 彼らも最初は、農業の成功というのは物産を売ってなんぼ、だったと思います。彼らだけでなく、生産者なら当然みなそうでしょう。もちろんそれは正しい。しかし、いろんな農家さんとお話をして判ったことは、「仕事に対する生き甲斐」を感じる瞬間が持てるどうか。例えば、誰がこの米や野菜を作ったのかを知ってもらい、喜んでもらう、評価されることが必要だと

思うのです。コネファの大阪での最初のイベントが始まる前、あるメンバーは、「都市の人は勝ちで、農村の者は負け。農業なんてあかん仕事と思ってるから、自分達が都会に出て行って、話すようなことは何もないのでは」と心配していました。しかし実際に蓋を開けてみると、都市で活躍するクリエイターから、「農業」や「物産」を賞賛され、会場のお客さんも心から楽しんでるのを目の当たりにしたとき、彼らの心が大きく変わった。後日、「初めて自分の仕事に誇りを持てた。誇りを持つことが、どれだけ励みになるか。生きていることが楽しくなった」と言ってくれたのです。

辻村 自分の生き方に誇りを持ち、自分を信じている人は格好いいですよ。

MOTOKO 世間における農業という職業のイメージをアップさせること。たとえば「アーティスト」と肩をならべることもあり、なのではないか。今回の「農家アート祭」で、私がコネファのメンバーと一緒にめざしたのは、農業が若い世代にとって、もっと気軽に



ディグミーアウト店内には写真・イラスト作品が展示されている

興味をもてる「カルチャー」となることです。どういふことかという点、既存の即売会ではただの野菜も、ここでは物語のある「作品」に変身する。ものづくりの背景にある物語を伝えていくことで、同世代の共感を得ることができずはまずです。この祭りは、啓蒙活動ではなく、経済活動にはとどまらず、農業とカルチャーの融合を、会場の皆が分かち合うことに意味があると思います。

若い世代が輝ける滋賀県へ

辻村 控え目だったはずの湖北の若者が、本当に頼もしく見えますね。

MOTOKO どういうことをすれば都市の人たちが喜んでくれるか、彼らが見せ方のコツを掴んだからだと思います。キャリアで言えば、まだまだ浅いかもしれませんが、でも世の中の主役は20代、30代で、その世代が輝くからこそ社会が明るくなり、自分も将来あなりたいと、後に続く子どもたちが出てくるのです。農村では年長者が絶対的で、コネファの世代は青二才と扱われる

けれど、プロ野球の斉藤柊樹選手だって、大成という意味では今のところ未知だけれど、間違いなく主役ですよ。それで、大成した星野仙一さんや野村克也さんだとかは、主役ではなく重鎮におさまっているでしょ。

辻村 本当にそうですね。では最後にコネファの若い力を滋賀の宝とするために、MOTOKOさんから見ても、私たちは何をすべきか、メッセージをお願いします。

MOTOKO 滋賀の農業が衰退しているって、一番困るのは誰かというと、県そのものに他なりません。そしてこの先、里山や農業の「負債」を抱えて大変な思いをするのは、コネファをはじめとする若手後継者の方々です。そこに対して、県や行政の対応は一体どうなのでしょう。滋賀という「神輿」のレギュラーの担ぎ手である彼らに対するあらゆるケアが足りないように思えるのは気のせいでしょうか。若くて健康で優秀な人材をスポイルすることがなにより「もったいない」ことである、と思います。

これから彼らが担って行く農業や地方の未来・将来を思えば、もう少し彼らのサポートを考えていただきたいのです。彼らにとって必要なのは、活躍できるステージです。「農家フェス」や「農家アート祭り」はその一例だと思うのですが、このようなステージで都市や外部の人々と交流することによって、彼らは大きく成長します。すばらしい教育の場なのです。

健康で優秀な若者がこれだけ揃っているのに、サポートしない、育てようとするのは、あまりにも「もったいない」。彼らがさまざまな人々と交流しながら、ネットワークを広げ、誇りを持って活躍できる機会を増やすことで、県はもっといきいきと変わってゆくと思います。

辻村 ありがとうございます。MOTOKOさんが湖国の若手農家の心まで覗いてくださったことに感謝しつつ、本日は長時間ありがとうございました。



MOTOKOさん(左から2人目)とKonefaの立見・家倉・吉田さん(左より)



京都

The Old and New Guide of Kyoto

ハードカバー：144ページ

出版社：ブチグラパブリッシング

言語：英語、日本語

ISBN-10：4939102866

ISBN-13：978-4939102868

発売日：2005/04

内容：2004年の春から秋にかけてライフワークとして取り続けていた京都の街、名所、料理、お祭りなどを様々な時間季節の中で切り撮った写真集

生きてい
るから
仕事。
MOTOKO

● MOTOKO (もっこ) 1966年大阪府生まれ。大阪芸術大学美術学科卒業。ポータル、ファッション、広告、音楽媒体など幅広い領域で活躍。主な作品集『DAYS』『FIRST EYE』『OVERS OF ROSECOE』『京都』他。2002年から始まった滋賀行きでは、田園風景や農家、祭りを精力的に取材。
<http://www.mil.jp/motoko.html>

● MOTOKOさんの取材の様子が見られます！

農林水産省（ホーム）フォトレポートギヤラリー（田園）
http://www.maff.go.jp/p_gal/motoko/index.html

● Konefa（コネファ）ブログ
<http://konefa.exblog.jp>

〈インターナショナルメッセージー独逸〉

食料品汚染から学ぶ 地元への愛



原 修子

ドイツでは昨年末から食料品のダイオキシン汚染が大きな問題となっている。鶏卵にダイオキシンが発見されたのが始まりで、鶏肉へと発展し、さらに豚肉へと及んでいる。原因は家畜の飼料。ダイオキシンが混入した背後には利益追求の「飼料マフィア」らしき組織の存在が浮かび上がり、政府は飼料の原料の出所をより明確に記載、追跡が出来るようにするという対策を遅ればせながら打ち出した。

このスキヤンダルが公になってから、バイオスーパーマーケットでは玉子は売り切れになっている事が多い。客数も増えている。バイオ食品ブームである。

以前にも同じような事があった。一例をあげれば狂牛病が発生したとき。

今回のブームは何時まで続くのかわろつかう?それとも一時的現象ではなく、人々の意識の中に根付くものとなるの

であるのであろうか?そうなって欲しいとは願う反面、より安いバイオ食料製品を提供するために、大手ディスカウントがより安い生産地から仕入れ、その輸送に飛行機、トラック等を利用する、つまり、それはそれで大気汚染に繋がってしまうという問題があるのを見逃せない。

地元のものを買う。この原点に立ち返って欲しいと願っている。

原 修 子

●はら しゅつこー 徳島市出身。1997年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

滋賀の魅力 応援カタログ



企画：湖国の里山、NPO法人木野環境
販売調整：湖国の里山
取材・記事作成：NPO法人 木野環境

このカタログについて

比良、伊吹、鈴鹿など、湖国を囲む山々から湧き出る清らかな水は、すべて母なる湖「琵琶湖」に注がれます。

そこに暮らす人々は、湖のもたらす恵みはもとより、山の恵みや、大地の恩恵を存分に受けて、豊かな文化を育んできました。

このカタログは、そんな滋賀で作られた品々を、生活全般に通ずる衣・食・住を切り口に、作り手が持つ、商品への思いやこだわりと一緒に紹介しています。商品の背景の物語から、「会ってみたい」「行ってみたい」「買ってみたい」と感じてもらいたい、との思いを込めました。

滋賀県を高島・大津・甲賀・南部・東近江・湖東・湖北の7つの地域に分け、それぞれの地域から作り手を選びご紹介しています。滋賀で作られた、思いのこもった素敵な品々をじっくりご覧ください。

清水 陽介さん
将来ごみにならない
木製サッソの商品開発中

7 どっば村建築部門エコワークス
湖北地域《行ってみたい》

坂下 道良さん
野菜や卵の「本物の味」
を引き出すプロ

1 楽農舎なごみの里観光農園
高島地域《買ってみたい》

藤居 正康さん
木田を生かしたかんざしを
作る、自称「木の料理人」

6 OWL'S ふじい
湖東地域《買ってみたい》

2 ほっとすていしょん比良
大津地域《買ってみたい》

北比良グループの皆さん
味噌も弁当も惣菜も！
まじめに一生懸命作っています

大島 正子さん
田んぼ生まれの鮎ずしを
滋賀のソウルフードに

5 本にごろ鮎専門 飯魚
東近江地域《買ってみたい》

4 菓志工房 うすなが
南部地域《行ってみたい》

薄永 金侍さん
洋菓子で地域を
元気に

3 かたぎ古香園
甲賀地域《買ってみたい》

片木 明さん
片木 隆友さん
信楽・朝宮茶を
全国ブランドに

高島地域「買ってみたい」

楽農舎なごみの里観光農園

作物にも人間にもストレスを与えない食材を生産する



鶏にストレスを与えない環境を造る坂下さん。



ブルンとしたレモンイエローの黄身の卵かけご飯は、ほっぺたが落ちるよう。



坂下オリジナルの床土は、鶏糞の脱臭と鶏舎の保温を兼ね備えた、フカフカな土。

「試行錯誤しながら
独自の農法を生み出す」

「これからの時代は農業が求められる」と、自宅のベランダでブルーベリーを栽培していたことがきっかけとなり脱サラ就農した「楽農舎なごみの里観光農園」代表の坂下道良さん。農業ができる土地を求め6年前に高島市に移住し「多くの方に安心安全で作物本来の味を提供したい。収穫する楽しさを知ってほしい」と観光農園を開業した。

「農薬や化学肥料を使うと、作物にストレスを与えてしまう。そして、それを口にする人間にも影響する」と、作物にも人間にもストレスを与えない栽培方法に重点を置く坂下さん。「農業は、その土地の気候・土・水で、何ができるか分からない。人に教わると応用がきかなくなるから、自分自身で試すしかない」という理由から、鶏糞や生ごみをEM菌で発酵させた「ほかし肥料」などを使い、防虫には害虫を寄せ付けないコンパニオンプランツ（共栄作物）を活用するなど、農薬や化学

肥料を一切使用しない独自の循環型農法で農業を展開する。そうすることで、「ナスビはリンゴの味。ニンジンも柿の味」といった、作物が本来持っている味を引き出す。

「レモンイエローの純国産卵」

鶏の卵や鶏肉の90%を外国産の鶏種に頼っている日本。「輸入先の鶏に頼っていたら、疫病などが流行した場合、ひなが日本に輸入されなくなる。卵や鶏肉が日本で食せなく可能性が出てくる」と危惧する坂下さんは、純国産の鶏「後藤もみじ」（岐阜県と「岡崎おうはん」（長野県）を約800羽平飼で飼育し、卵や鶏肉を販売する。

この2種も、坂下さん独自の手法で手塩にかけて飼育。飼育小屋には、おがくず・米粉・木くずなどを混ぜ合わせたものを敷き詰めて、暖かく鶏糞のアンモニア臭を脱臭する効果を兼ね備えた環境を作りあげている。また、鶏の主食には、地元の精米所などから出るヌカ・くず米・地元の豆腐屋のおから・小松菜の外葉など、捨てられていた

お買い物



1. 季節のおまかせお野菜と卵2000円セット (5~1月) ￥2,000
2. 季節のおまかせお野菜と卵3000円セット (7~10月) ￥3,000

※写真は(1)のセットです。

※2・3・4月は、野菜の十分な収穫が見込めないため、セット販売しておりません。



3. 卵4パック：40個（通期） ￥1,440

楽農舎なごみの里観光農園

T E L : 090-1150-3659

E-mail : rns-sakachin@nifty.com

住 所 : 滋賀県高島市安曇川町下古賀2579

地元の「もったいない自然資源」を有効的に活用する。さらに、雄も一緒に飼育しているため、卵はすべて有精卵である。そうした環境で育つ鶏からは、プリンとした弾力、クセや雑味がない甘くて濃厚な卵本来のレモンイエローの黄身が産まれる。

産みたて新鮮卵は、同農園や道の駅などで売られ、この卵を求め販売所に多くファンが足を運んでいる。また、高島市物産振興会が商品化した「究極の卵かけご飯セット」の卵にも選ばれ、ご飯と

相性のいい「究極の卵」としても人気だ。

「スローライフをキーワードに」

「日本の食生活が豊かになることで様々な弊害が起きている。そのことを考え安心安全の作物を栽培し、それを分かってくれる人に食べてもらいたい」と話す坂下さん。農園に訪れるお客さんと交流しながら、障がいがある人たちや近所の人にも、畑でのんびり、ゆっくりしてもらおう農園を目指し、安心安全な生産物を提供する。



笑顔がステキな北比良グループのメンバー



本邦初公開の、まじめで一生懸命な“お母さんの手”!



店内では夕飯の「もう一品」に重宝しそうな手作り惣菜が好評

大津地域「買ってみたい」
ほっとすていしよん比良(北比良グループ)
味噌も弁当もコロッケも!
おいしさの秘密を握るまじめで一生懸命な“お母さんの手”

【始まりは農家女性の共助活動】

大津市北比良地区で、1967年から活動する「北比良グループ」。農村女性の地位向上を目指し、農繁期の協同炊事など共助活動をする「北比良生活改善グループ」として、25人のメンバーで設立された同会は、81年ごろから地元の大豆と米を材料にした手作り味噌の製造販売を始めた。「農家女性のグループで、味噌のバック販売を始めたのは県内で初めてと聞いている」と話すのは、同グループ副代表の山川君江さん。地元産の食材で作る味噌の評判はよく「小中学校(旧志賀町内)の学校給食でも使ってもらっていたんですよ」。

【メンバー加入で新商品開発 —から始めた畑仕事—

長く続いていた活動だが、家庭の事情や高齢化でメンバー数が減少した02年、団体設立後初のメンバー募集で若い仲間が加わり、現在は10人で事業を継続する。初期から活動に関わる先輩“らは、06年に完成した加工場”手作り工房比良の里“

での味噌作りを担当し、山川さんはじめ”後継者”と呼ばれる若手メンバーが、新商品開発や04年に開業したJ.R比良駅前”の”ほっとすていしょん比良”で味噌をはじめ惣菜や弁当、パンなどの手作り商品の販売や喫茶対応などに携わる。

施設開業にあたり「野菜作りや体験農園・消費者交流会もできたら」と軽い気持ちで畑を借り、サツマイモを植えたが「若手メンバー全員、鍬の持ち方も知らなかったんです」と笑う山川さん。だが「畑仕事をする事で、風景や湧き水、空気のおいしさなど地元の良さが身に沁みるように分かってきた」と言い「それをみんなに伝えたくて」体験農園のほか「畑でコンサートやお茶会も開いています」と笑顔。

「地域にある良いものを商品に 伝えたいのは、 ほんもののお母さんの味」

北比良グループの新商品開発コンセプトは「目の前にあって、すぐ使える材料でおいしいものを作ること」だと話す山川さんは「大豆と米と、おいしい

お買い物

水があったから味噌が出来た。各家の庭で採れる甘夏からマーメレードを作り、山椒が取れないから練り味噌に大葉を混ぜた。無いもの、出来ないことを嘆くより、地域にある良いものを生かすことが大切」だと言い、事業を継続する中でうれしかったのは「一生懸命

やっていれば、必ず誰かが見えていて助けてくれたこと」だと笑顔がほころぶ。今後は「足元のしっかりした経営を目指し、若い人に仲間になってももらえる環境をつくるのが目標」だと言い「先輩らの熱い思いを次の世代に繋ぎたい」と意欲を見せている。



1. 比良の里Aセット
¥2,700-
・普通味噌400g (1パック) ・倍麹白味噌400g (1パック) ・大葉みそ120g (1袋) ・ゆずみそ120g (1袋) ・ひらかりん120g (1袋) ・夏みかんマーメレード (1瓶)



2. 比良の里Bセット
¥3,900-
・普通味噌800g (1パック) ・倍麹白味噌800g (1パック) ・大葉みそ120g (1袋) ・ゆずみそ120g (1袋) ・ひらかりん120g (1袋) ・さつまいもちっぶ90g (1袋) ・夏みかんマーメレード (1瓶)

ほっとすていしょん比良 (北比良グループ)

Tel/Fax : 077-596-1679
住所 : 滋賀県大津市北比良290-1
営業時間 : 10:00~17:00
営業 : 水・土・日曜

甲賀地域「買ってみたい」
かたぎ古香園
 無農薬で茶園を守る親子の思い「朝宮茶を全国ブランドに」



朝宮の地で無農薬茶葉の栽培を続ける片木さん親子（片木明さん、隆友さん）



「朝宮」の地名が光る茶葉のパッケージ



豊かな香りが評判の無農薬茶葉

「無農薬で茶葉を育てる」
 茶農家の6代目が始めた
 無謀な挑戦」

かたぎ古香園が無農薬の茶づくりを始めたのは昭和50年。茶畑には、年間10回以上の農薬散布が当たり前だった時代に、思い切った決断をした理由のひとつを「お客さんの顔が見えるようになったこと」だと話すのは、同園6代目の片木明さん。

片木さんの茶畑がある甲賀市信楽町朝宮地域は、日本最古の茶産地で「茶業界では高品質の茶葉産地として古くから有名だった」と胸を張る明さん。しかし「茶葉のほとんどを隣の有名産地に卸していたため、一般消費者が朝宮の地名を知らないのが残念で」。

そこで明さんは、自園で生産した茶を製品化。朝宮茶として催事や一般家庭を訪問して対面販売を始めた。「お客と直接話すようになり、中途半端な商品を作れへんと思うようになった」明さんは「茶葉は洗浄せずに口に入る農産物だからこそ、安心安全でなければ」と

の思いを強く持つようになったと言う。

「自然の力を知り、自然に寄り添う茶づくりを目指す」

無農薬で茶を作り始めた明さんだが、当時無農薬茶園のデータや実績はどこにもなく「始めの2年は、まるで収穫できませんでした」と苦笑い。3年目によりやく、農薬散布時代の約4割を収穫した茶園には「害虫を食べてくれる、クモやカマキリ、テントウ虫などが生息し、自然の力は偉大だ」と実感。心配した品質も「香り高く、味わい深い茶葉が生産できるようになった」と、無農薬栽培の効果を喜ぶ。

「父の偉業を尊び、 思いを受け継ぐ7代目」

同園7代目の隆友さんは、同園が無農薬栽培開始後の昭和54年生まれ。「僕、農薬散布をしたことありませんねん」と笑顔で話し、父の偉業を「やり始めたこともすごいけれど、実績を積み上げていくことがさらにすごい」と称える。現在、父とともに約2ヘクタールの

茶園で無農薬の茶葉を栽培。製茶、販売も手掛ける隆友さんは父同様「消費者の声を直接聞ける貴重な機会」だと仕事などでの対面販売を続けている。また「自分たちの取り組みを消費者に伝えることも大切な仕事」だと、茶園のチラシやパンフレットには商品紹介だけでなく、地域の歴史、製茶の信条等がぎっしりと書かれており片木さん親子の思いが伝わる内容になっている。

「目指すのは世界ブランドの 紅茶づくり——7代目の挑戦」

そんな隆友さんが挑戦するのは「国産無農薬紅茶」。昼夜の気温差が大きい朝宮の気候風土は「高品質の紅茶が作れる条件が揃っている」と言い「朝宮の紅茶を世界で通用するブランドに育てたい」と茶園の7代目は次なる夢を膨らませている。

お買い物



1. 無農薬朝宮最高級煎茶
『手づみ煎茶』(100g)
¥3,150 (税込み、送料別)



2. 無農薬朝宮特選特上煎茶
『朝宮の粹』(100g)
¥1,575 (税込み、送料別)



3. 無農薬朝宮上煎茶
『上煎茶』(100g)
¥1,050 (税込み、送料別)



4. 無農薬朝宮ほうじ茶
『上ほうじ茶』(400g)
¥735 (税込み、送料別)

かたぎ古香園

TEL: 0748-84-0135

FAX: 0748-84-0128

住所: 滋賀県甲賀市信楽町宮尻1090

南部地域「行ってみたい」

菓志工房 うすなが

季節感を大切に、地域密着型の洋菓子店が作る“都会より一回り大きなケーキ”!



大きなガラスケースに並び、趣向を凝らしたケーキの数々



避暑地のペンションのような佇まいの店舗に、扉を開ける前から期待が高まる



「おいしいがうれしが」キャンペーンで商品の説明をする薄永さん。伝統野菜のスイーツに知事もびっくり! (右が薄永さん)

「女子好みの外観に
ペンションアップ!」

電話で取材のお願いをし、店舗の場所を尋ねると「大丈夫、すぐ分かりますから」との返答。土地勘もなく、不安な思いで野洲市内の住宅街を進むと、遠くからでも人目を引く建物が現れた。

高原に立つペンションか、はたまた絵本で見た小人のおうちのような佇まいながら、しつぽりと町並みに溶け込む「菓志工房、うすなが」。手入れの行き届いたアプローチの草花を楽しみながら玄関扉を開けると、カラフルなケーキが並ぶ大型のショーケースが目飛び込んでくる。壁一面の棚には焼き菓子、中央の冷蔵ケースには生チョコやパステルカラーのマカロン。センスの良い小物や雑貨も飾られ、まるでおもちや箱のような店内だが、不思議と狭苦しい印象を受けないのは、広い通路や太い梁が見える吹き抜けの天井、そして何より明るい接客のなせる業だと、次々来店する地元客への応対を目の当たりにして納得。

「その時いちばんおいしい産地から取り寄せる」

旬を意識した洋菓子

同店オーナーの薄永金侍さんは「地域密着型の店では、リピーターを増やすことが大切」だと話し、そのため「季節感を大切に商品構成を心がけている」と胸を張る。冬から初春に出回るイチゴに始まり、桃、ブルーベリー、イチジク、鳴門金時など「その時、いちばんおいしい産地から」取り寄せた食材を用い「ぱっと目を引くデコレーション」を施して仕上げる洋菓子は、京都や大阪の有名店のものより一回り大きい。その理由を尋ねると「地域性を考慮すると、この大きさになった」とにっこり。「洋菓子は、毎日食べるものじゃないけれど、家族のハレの日はここのお菓子で、と言ってもらいたいから」と薄永さん。

「地域との連携でさらなる事業展開 無理の無い地域おこしのかたち」

春先のイチゴとブルーベリーは、市

行き方



●公共交通機関の場合

JR野洲駅から、市内循環バス「あやめコース」「乙窪」下車後、徒歩

●車の場合

国道8号「小篠原」交差点を、琵琶湖方面に向かう。そのまま、まっすぐ約15分程度。「西河原北」交差点を右折後、左手。(駐車場:あり)

菓志工房 うすなが

T E L: 077-589-6053

住 所: 滋賀県野洲市乙窪478-13

営業時間: 9:30~19:30 (喫茶営業10:00~18:00)

定休日: 毎週木曜日

内の契約農家で作られており「農園に outcomes 出向いて完熟のタイミングを確認したり、素材の生かし方や保存方法をともに検討したり」と、産地の近さを最大限に活用する。

地元小学校の講師依頼を引き受け、近隣大学のお菓子サークルとのコラボレーション企画にも積極的に関わるなど、多方面にネットワークを広げる薄永さんは、滋賀県と食品販売業者等が協働

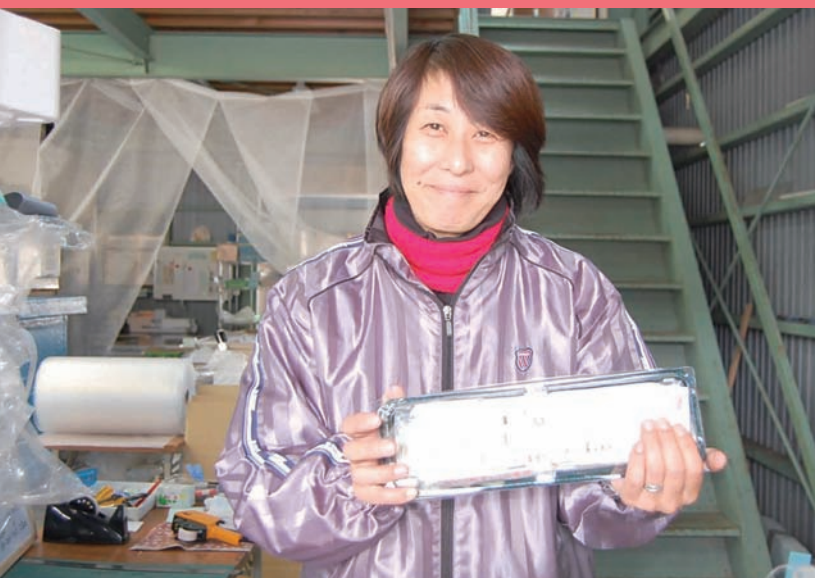
で推進する運動「おいしがうれしが」キャンペーンにも参加している。地域で生産されたものを地域で消費する「地産地消」を推進する同取り組みの中、「伊吹の赤かぶスイーツ“や”秦荘の山芋スフレ”など県内伝統野菜を素材に用いた商品を次々と考案してきた薄永さんは「地域おこしと言いつと難しいけれど、頂いた縁を大切に地元が元気になる仕掛けを作っていきたい」と笑顔を見せた。

東近江地域「買ってみたい」

本にごろ鮒専門飯魚

「まあいっぺん、食べてみてー!」

”田んぼ生まれ”の鮒ずしは、漁師の技と味を受け継ぐ伝統の味



「やわらかく、臭みのない」自慢の鮒ずしを手にする大島さん



田んぼで養殖を続けるニゴロブナ



田んぼを活用した養殖場は「ちょっと昔の琵琶湖」に似た環境になるよう配慮する

「父の思いを受け継ぐ 農業への挑戦」

近江八幡市安土町で生まれ育った大島正子さんは、京都で学生時代を過ごし、デザイン関連の会社に就職。結婚後も京都暮らしを続けていたが父親の死をきっかけに地元に戻った。

大島さんの父親は1960年代に脱サラをして、同市大中の湖干拓地で就農した。「先祖代々続いてきた農家ではないけれど、農業の活性化を願って田んぼ仕事に精を出す父親の背中を見ながら育った」大島さんは三人姉妹の長女。「父の思いをいちばんたくさん受け止めていたのかも」と振り返る。

「農業だけじゃ食べていけない! 新たな道を模索」

だが、大島さんが家族とともに故郷に戻った96年当時、70年代から始まった米の生産調整いわゆる減反政策が、新たな食糧法の施行等の転換期を迎えていたため「米作りだけで家族が暮らせる収入が得られない状態」で「増収の

ためスイカやケナフ栽培に挑戦し、散々な結果に終わりました」と苦笑する。

新たな農産物を模索していた頃、新潟に住む知人から田んぼで錦鯉の養殖をしている話を聞き、早速自田を池にし、錦鯉と金魚、ニゴロブナの稚魚を放流。翌年鮒ずしの原料として親しみがあつたニゴロブナに限定し、本格的に養殖事業を始めた。しかし当初は、ニゴロブナが鮒ずしの原料になる大きさに成長するのに、3年もかかることすら知らず「資金繰りには相当苦労しました」。

天然のニゴロブナにこだわる大島さんは、琵琶湖の底引き網漁で獲れたニゴロブナを買い上げ、養殖池で自然産卵させ育ててきた。独学で生態や飼育方法を学び「数年かけて、本物のニゴロブナを育てられるようになった」と胸を張る。そんな大島さんの加工場では、70歳を越える沖島のベテラン漁師が、地元主婦らに漁師伝統の漬け方を伝授している。「米と塩だけで、柔らかく臭みの無い鮒ずしを作る技術を、なんとか受け継ぎたいが、10年で漬け込み作業はたった10回しか経験できなくて」。

お買い物



1. 幻の「にごろ鮒」のほんもの鮒ずし
近江本ニゴロ鮒ずし(180g) ￥5,500
2. 幻の「にごろ鮒」のほんもの鮒ずし
近江本ニゴロ鮒ずし(100g) ￥3,000

本にごろ鮒専門 飯魚

TEL: 0748-46-6554

FAX: 0748-46-6544

住所: 滋賀県近江八幡市安土町上豊浦973-1

「自然に近い環境を整えるために、手間ひまをかけるー何もしないと自然は守れない」

大島さんの養殖場では、魚の病気予防や治療のための薬を一切使っていない。その理由を「自然に近い環境で育つから魚のストレスが少なく、使う必要が無いから」。しかし何もしないことが自然のままではなく、「ちよつと昔の琵琶湖の環境を作る配慮と努力は

惜しますしています」。

「鮒ずしを滋養のソウルフードに気軽に食べてもらえる工夫を」

鮒ずしを「高級な珍味ではなく、気軽に食べてもらえる滋養のソウルフードにしたい」と話す大島さんは「価格や食べやすさにこだわるだけでなく、新しい食べ方の提案もしていきたい」と今後の事業展開に意欲を見せている。

湖東地域「買ってみたい」

OWL'Sふじい

「木の料理人」が生み出す木目を生かした美しいかんざし



木片からかんざしの原形が切り出される



独特のカーブが頭髪をしっかりと留める



木目を生かしたオリジナルのアクセサリー



作業する藤居さんの眼差しは職人というより、宝物を手にした少年のように澄んでいる

「木のぬくもりを知って欲しい」工芸品からアクセサリー作りへ

「木が呼んでくれるねん」。そう言いながら、さまざまな色や形状の木片を自慢げに並べ始めた藤居正康さん。印刷会社で化粧合板のプリントに携わっていた藤居さんは「子どもが社会人になり、そろそろ自分の好きなことをしてもいいかなと」50歳で早々に退職。「木が持つ、美しい木目をたくさん見つけた経験を生かして」木片を用い、ふくろうの置物などの工芸品を作り始めた。木目を生かした独特のフォルムを持つフクロウの置物は、客からの評判も良く販売も順調だったが「見るだけでなく、木に触れその温もりを実感してもらいたい」と数年後には、ネックレスやブレスレットなど直接肌に触れるアクセサリーの制作を始めた。「もともと飽き性でね」と照れ笑う藤居さん。出来上がった作品をブログなどで発信するうち「木にこだわる人とながるようになり、仲間が全国に広がった」と言う。

「困難への挑戦。誰でも使える
木製かんざし目指して」



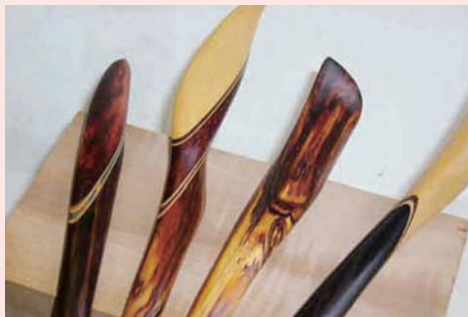
即売会でかんざしの使い方を実際に説明



髪と頭に藤居さんのかんざしがフィットする

ウェブ上で交わす対話の中で「一本だけで髪をまとめられる木のかんざしを作って」と依頼された藤居さんは「最初はそんなに難しいことだと思わず、気軽に引き受けたけどこれが難問で」と当時を振り返る。頭の形だけでなく、髪質や長さ、弾力など、一人ひとり異なる条件をすべてクリアするかんざしの形状を極めるため「対面販売を繰り返し、直接意見を聞きながら改良を重ねていった」と話し、藤居さん自らも髪を伸ばして、客に使い方を実演してみせた。結果「そろそろ、理想の形に近づいてきたかな」と手ごたえを感じ

お買い物



1. 彦根かんざし ¥2,000

※同一のデザインですが、樹種や色などは多様にご
ざいますので、異なる場合があります。

OWL'Sふじい

TEL: 090-4900-1747

Email: owl_2960mfz@yahoo.co.jp

住所: 滋賀県彦根市川瀬馬場町372-5

「木の料理人の新たな挑戦」

藤居さんが、かんざしの材料にするのは唐木、紫檀、黒檀など、家具や工芸に使われる木材がほとんどで「今では手に入らない貴重なものもたくさんある」と誇らしげに話す。アジア・アフリカを始め、世界各国の珍木が山と積ま

れている藤居さんは「もしかすると、これがかんざしの世界標準になるかもし
れんよ」といたすらっぽく笑う。
れた工房で、無造作に木片を手にした
藤居さんは、下書きもないまま電動の
こぎりでカットを始めた。10数分後に
は優雅なカーブを描くかんざしが出来
上がり、その表面には美しい木目が見
える。「魔法みたいですね」と声をかけ
ると「木が呼んでくれるねん」と再び。
今後は「木製の眼鏡に挑戦したい」
と話す藤居さんは「同じものを作り続
けるのはおもしろくないやん。進化し
たいしね」と職人の顔をのぞかせた。

湖北地域「行ってみたい」

どっぽ村建築部門エコワークス

将来ごみにならない家づくりを目指して
100年以上も保ち、ごみにならない木製サッシの商品開発



「もっと木製サッシのことを知って欲しい」と話す清水さん



現在建築中の将来ごみにならない「新しい家」



商品開発中の木製サッシ

「米もつくる大工」

若い頃、勤めながら自分の家を自分の手で建てたという「どっぽ村建築部門エコワークス」代表の清水陽介さん。現在、「農」と「大工」の技術を実際に

現場に出て経験しながら、「つくる」暮らしを習得する場を提供している「どっぽ村」で大工技術を担当し、そこで学ぶ研修生たちにその技術を伝えている。

そもそも清水さんが大工に関心を抱き始めたのは、20代前半、自転車で世界を旅したことが始まりだったという。旅する中で「人間が生きて行くには、家と食べ物が必要」だということに気づき、帰国後「家を建てられれば仕事になるし、農業をすれば食べていけると「米もつくる大工」となった。

「昔ながらの方法と、新しい考え方を取り入れた「新しい家」」

その後、環境問題に関心を持つようになった清水さんは、大工として「多くの会社が販売している家は、将来ごみになることを考えないまま商品として販売

している」と疑問を抱き始めた。「人間は地下資源を容赦なく使いすぎている。家に工夫をするだけでエネルギー使用は最小限で済む」と、将来ごみにならない「新しい家」の建築を始めている。

その「新しい家」は、壁に竹や土を利用した土壁を使う昔ながらの伝統工法と、太陽エネルギーを熱として蓄えて暖房等に利用し、また天井近くに設置した窓で室温調整ができる機能を備えた「パッシブソーラー」という新しい考え方を組み合わせた設計方法で建てられる。さらに、発注者と大工らが一緒に家を建てる「ハーフビルド方式」にこだわる。発注者が大工と一緒に汗を流して家を建てることで、「自分で家を建てる」と愛着がわく。家を守ろうとする気持ちを持つてくれる」のだと、清水さんは笑みを浮かべながら語った。

「木製サッシの商品開発」

清水さんは、さらに「木製サッシ」の商品開発も手がけている。この木製サッシには、国内産の杉の中でも特に強度の高い「赤身」と呼ばれる木の中心

部分に、柃目（樹心に平行した真っ直ぐな木目のこと）があるものだけが使用される。現在建築を手がける家にも、木製サッシを取り付けるのだという。

現在、多くの家で使用されているアルミサッシは、製造過程において木材の1600倍の熱エネルギーを使用し、40年から50年で劣化しごみになるといふ。それに比べ木製サッシは、少ないエネルギーで加工でき、100年以上も使い続けられ、朽ちても自然に還せるため、ごみにならない。

この木製品の特徴に注目し、アルミサッシと同じデザインで製作される木製サッシは「昔の木製建具のように、家の中に雨・風が入り、風でうなることもなく、結露を起しにくい」と、胸を張る清水さん。

行き方



- 公共交通機関の場合
JR高月駅より、レンタサイクルで約15分。
- 車の場合
北陸自動車道長浜ICから約15分、または木之本ICから約10分

農事組合法人大戸洞舎内
上山田どっぽ村事務局
TEL: 090-1908-1915
住所: 滋賀県長浜市小谷上山田町880

現在、木製サッシの加工には、高度な技術が必要となるため、アルミサッシよりも2〜3倍高価な商品となっている。今後「なるべく低価格で提供できるように、その技術を生みだしたい」と話し、工夫を重ねている。

さらに「低価格で普及すれば、将来、どっぽ村の研修生たちの仕事にもできる」と、雇用も視野に入れた商品開発が行われ「もっと、木製サッシの特徴や良さを伝えていきたい」と、意気込む。

湖国の里山コンセプト

地域資源である「琵琶湖」「里山」を有する滋賀県においては、人を惹きつける自然風景の美しさや自然環境をうまく利用し、はじめに良いものを作っている地場産業が息づいています。

そこから生み出される製品を、「湖国の里山」は自然風景や環境・歴史・伝統、文化を背景とする製品の持つストーリーを掘り出して情報発信することにより、製品の持つ魅力を最大限に発揮し販売に結びつけ、しいては滋賀のブランドを構築したい、とスタートしました。

「滋賀の魅力応援カタログ」を木野環境とM.O.H通信とともに作成するご縁をいただき、このカタログを通じて多くの方々にハートのある「メイドイン滋賀」を紹介します。

ウェブサイトでも販売を行っています
<http://www.kokokunosatoyama.com/>

鈴木和慶

●すずきかずよし=1965年2月生れ彦根市在住。滋賀ブランド構築を目指し、滋賀のよいものを紹介するサイト『湖国の里山』を開設。同代表、近江スローライフの会 理事

NPO法人 木野環境紹介

木野環境は、こみ省エネ、ライフスタイル、森林保全等の分野から、持続可能な社会を目指し、無理なく取り組める仕組みづくりの提案を行うNPO法人です。農村の元氣も持続可能な社会の中でとても重要なポイントだという思いから、農村地域や地域の人たちを応援する活動も行っています。

その取組みの一つとして、作り手を応援することで、農業や地場産業、そして農村地域を応援しようと、今回のカタログづくりを行いました。紙面の向こうの人の手や熱意、そして背景の地域に思いを馳せていただき、そこに“つながる”きっかけとなりますと幸いです。

※NPO法人木野環境は、滋賀県立成22年度農村の魅力発信プロジェクト業務の一環として参加しています。

前田晴美

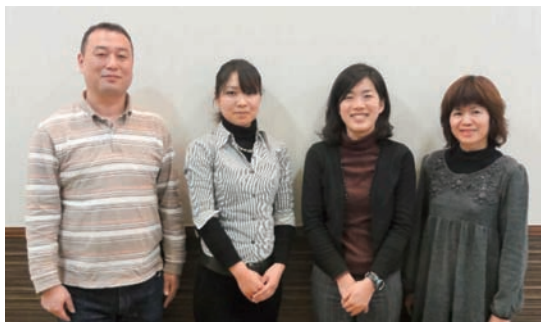
●まえだ はるみ
 広島県出身。学生時代から滋賀県湖西地域を中心に、フィールドワークを行う。現在、NPO法人木野環境に勤務。

川端 啓子

●かわはた けいこ
 京都市出身。見た目はおばはん、中身はおっさん。酒と馬をこよなく愛する“滋賀潜入調査員”のひとり。通称“おけいはああああん！”

北井 香

●きたい かおり
 奈良県山辺郡山添村出身。大津市在住。NPO法人木野環境にて、心惹かれる田んぼや農村関係の業務を担当。農村の応援をしたい！と模索中。



カタログ制作スタッフ、左から鈴木氏、前田氏、北井氏、川端氏

《買ってみたい》の送料について

【業者】ヤマト運輸

【送料】※くわしくは各ご注文の際にお問い合わせください。

- 本州・四国・九州：
 - 普通 (100サイズまで) 600円
 - クール (100サイズまで) 810円
- 北海道・沖縄と周辺の離島：
 - 普通 (100サイズまで) 1100円
 - クール (100サイズまで) 1310円

3/26
開催!

地域を守る地産地消～生産者と消費者の絆づくり～

生産者・消費者交流会

〔主催〕 M・O・H通信、湖国の里山、NPO法人木野環境
〔協力〕 多賀里山クラブ、NPO法人環人ネット

滋賀県には、琵琶湖と琵琶湖を囲む平地や山など、豊かな自然の宝物があります。人々は、その自然を暮らしの中で活かして生活し、道具や作物や郷土料理など、自然に寄りそった文化を育んできました。このたび、いざなぎ、いざなみの大神が鎮座するといわれるまち、多賀にて、暮らしの中の“衣食住”を支える県内の生産者の方々から、それぞれの熱意や思いを聞く交流会を催します。江戸時代の庄屋屋敷“多賀「里の駅」一圓屋敷”を会場に、滋賀のいいもの・美味しいものをいただきながら、地産地消や、生産者と消費者の“絆”について皆さんで考えてみませんか？

日程

日 時：2011年3月26日（土）13:30～17:00（定員：60人程度）

場 所：多賀「里の駅」一圓屋敷

〔住所〕 多賀町一円149番地（駐車場あり・近江鉄道 多賀大社前より徒歩20分程度）

参加費：ひとり2000円（会場費・交流会参加費として）

プログラム ※それぞれの時間は目安です。

13:30 開会 第1部 講演「地域を守る地産地消～生産者と消費者の絆づくり～」

スピーカー：森建司さん（新江州株式会社代表取締役会長）

応援スピーカー：内藤正明さん（琵琶湖環境科学研究センター所長）・今関信子さん（児童文学作家）

休憩

15:00 第2部「生産者・消費者交流会」

15:30 県内の生産者の方々から、製品へのこだわりや思いをお聞きします。参加者の皆さまとの交流時間や、自慢メニューの試食、即売の時間も設けております。

17:00 閉会

申込先・お問い合わせ

NPO木野環境（担当：川端、前田、北井）

mail:oubo@kino-eco.or.jp

〒600-8085 京都市下京区葛籠屋町515-1

TEL：075-708-8061 / FAX：075-708-8062



荒野に建つ、アメリカ・ニューメキシコ州タオス「アースシップ」

建築家 マイケル・レイノルズの 家を訪ねて

清水 陽介

海外の建築家は、未来の家と暮らしについて、どう考えているのだろうか？

その考えは、どのように実践されるのだろうか？日頃から疑問を抱いていた。そんなとき「タオスに行くよ」と声が聞こえた。日本の滋賀県の大工である清水洋介氏だ。早速、寄稿をお願いした。

同じ分野で生きる者同士

「電気も水道も下水処理も全てがタダなのだ」と大きく天に向かつて手を広げるマイケル・レイノルズという人物。彼はアメリカのニューメキシコ州、タオスという街で「アースシップ」という団体を率いている。私はある講演会がきっかけで、彼ののことを知った。

建築家であるマイケルの家の在り方とエネルギーに関する考え方は、私の心を大きく震わせた。私が追い求める家と建築の手法が、それと見事に一致したからだ。とはいえ、私は大工であり、設計という仕事を生業にしている彼とは、また異なる工程を踏む。しかし、同じ建築の分野で生きる者同士、という勝手な思い込みで、彼に逢いに行くこと決めたのは彼を知った2年後、昨年の夏のことであった。

私自身は独学で設計を学び、エネルギー性能という視点で、これまで家が手がけてきたが、それなりの成果はあるものの、はつきりとした目標となる家

にはまだ到達していないと感じていた。マイケルの設計した家に暮らしてみて、その家が自分にとつての目標になれば、より今後の仕事に集中できると考えた。それには一つ大きな理由があった。その年の11月に上棟する。小林邸が、これまで独学で学んだほとんど全てを実施できる建物であったからだ。すでに設計も済み、仕事は進行中であったが、独学では足りない。何か“があるとしたら、それを学び、この仕事に間に合わせたいと願った。

古タイヤ、空きビン、 空きカンを建材に

8月、日本は猛暑の最中。アメリカ南端の州もさぞ暑いだろうという予想は大きく外れ、現地は夜になると肌寒いほどの気温だった。内陸部のせいだろう。タオスは小さな村で、村をはずれると果てしない荒野が続く。そこにマイケルの家々は建っていた。勉強会の時、ビデオで見た家々が目の前にある。確かに電気も水道も通っているよ

うな場所ではない。

家の北面をほとんど土中に埋めたスタイルで、南面が大きな開口部になっている。古タイヤに土をぎっしり詰め、平らに並べてレンガのように積み重ね、家の骨組みに利用していた。壁に埋め込んだ空きビンや空きカンが、アートの空間を創りだしている。雨水は全て地下のタンクに集められ、飲料水や生活用水に使われる。荒野であるということとは、こういうことなのだ。

我々日本で暮らす者の水に対する感覚は、あまりにも無頓着。

荒野の家で、飲料水は蛇口から出るようになっていっているものの、鍋一杯の水をためるのに10分位かかる。この水はタダなのだが、それなりに”心の準備“がなくては単なる”不便“の体験で終わってしまいうた。

日本に暮らすほとんどの者が水への感謝をさほどしていない。日本という国の豊かさがそこにあるとも云える。

何故、マイケルはこの荒野に家を建てたのか。もっと豊かな土地だっただけではない。見渡す限り茶色の大地が



1



2



3



4



5

- ①空が高い。雨が少なく日射に恵まれている
 ②リビングは温室と接している
 ③ソーラーパネルとその他の機器類
 ④明るいキッチンも温室と接している
 ⑤古タイヤは家の骨材、建設中のアースシップの建物
 ⑥アートな雰囲気のあるバスルーム
 ⑦希少な雨水はすべて水槽へ



6



7

広がり、まばらに低木があるだけで、まるで月の世界と変わらない。夜は満天の星空の下、黒く横たわる大地にアースシップの家々の明かりがともるが、日本の農村のそれとは全く違う景色に思われる。田んぼや畑、林や森、そこに暮らす動物たち。日本は特別な国なのだ。そのため思う。星空の下、私はかつて若い頃、旅をした日々を思い出していた。

楽しみながら自給する感覚

21歳から25歳まで、私は自転車で世界を巡った。大地にテントを張って、数え切れないほどの夜を過ごした。自転車という乗り物は、自分の脚でごくしかない。自力でしか前に進めない。エネルギーは食い物と水、そして自身の意志だ。アフリカのサハラ砂漠は、その意志が一番試される場所であった。次の街まで700キロ。その距離を1週間かけて走る。一日一日、食べる量と飲む量を計算しながらコントロールする。しかし、それがそれなりに楽しい。仕方がないからというので

はなく、楽しみながら自給する感覚なのだ。旅で得たその感覚が、その後の私をエネルギー自給という発想、建築や農業へと導いた。そして今、アメリカにまで足を運ばせたのだ。

私は、マイケルの家に滞在して、あらゆる種の安心感を覚えた。それは、技術的に何かを得たというような理由からではない。むしろそれに関しては、日本の建築技術の方がより高度で緻密さを有しているという確信を得た。

理由はマイケルが35年もの間、この片田舎の荒野で彼自身が見据える未来に向かって考え続け、自らの人生と自らの家を用いて考え続けているということだ。諦めるということをしなない彼の生き方に感銘した。

自転車で地球を一周したこと

今、社会は大きく変わろうとしている。その変化の波は望むと望まざるとにかかわらず、一個人にも押し寄せて来る。地球温暖化、民族問題、世界的経済不況、これらを生み出した”文化“から、

我々は離れることができるだろうか。

かつて私は、自分の足で地球を一周した。自転車というのろまな機械とともに。冒険というほどの旅ではない。日本から西へ向かってペダルをこげばヨーロッパ。そこから南へ向かえばアフリカ。極端な話、ママチャリでだって可能な旅なのだ。だから、素直な旅の感想は、『実感として地球は大きくない』ということだった。

そんな小さな星の地下資源を、我々はとことん掘り続ける。石油も石炭も無尽蔵ではないことを誰もが知っているのに、掘っては使い続ける。

人と人が争うことの愚かさも嫌というほど知っているのに、今日も争いは続いている。しかしながら、批判や悲観から生まれるアイデアは次の世界を創るのに向かない、と思う。マイケルのアイデアは悲観から生まれたものではないことが、滞在してみてわかった。

未来を一緒に感じとる

荒野の家。マイケル・レイノルズは、



半径500メートルの強大なスプリンクラー。これが農業なのだろうか…

ここで実証を重ねてきた。ここでもこんなに豊かに暮らせるということをも、自ら証明してみせているのだ。もし彼に見習うとすれば、それは彼が見据える未来と一緒に感じとることだろう。エネルギーの生産性や効率性を追い求めるよりも、自然で何でもないことを、誰もが普通にやり通す、未来の文化に触れることだと思う。その上で、建築が単なるデザインや機能を超えて、生き方の提案ができるようになればと願っている。

私は彼の生き方に感銘を受けた。彼の設計する家が素晴らしいと思ったのは事実だが、そこに漂っている彼の“決意”のようなものを感じたからだ。マイケルの思想に触れるため、アースシップが手がけるレントハウスに滞在するには、もちろん事前のアポが必要だ。しかし、マイケルにはあえてアポをとらなかつた。私たちがレントハウスを発つその日の朝、彼は出張先のカナダから帰ってきた。アポをとろうがとるまいが、同じ結果になったと思う。スタッフから留守中の報告を忙しく受ける彼と

話せたのは10分程度だったが、それでは充分だった。

”2030年から見た” ”普通”の家を建てる

旅から帰り、しばらくして小林邸の工事が始まった。2030年の時点から見た”普通”の家だ。太陽の光と自然の風を目一杯に取り込むパッシブソーラーハウス。雨水も7000リットル貯められる。家の南面には温室があり、食糧生産と暖房の熱源として機能する。地下には食品貯蔵用の大きなスペースがあり、その一部は作業スペースにもなる。ひんやりとした地下空間には、昔ながらの蔵のイメージを重ねている。真夏の暑さ対策として、地の冷たい空気を利用するクールチューブを地下に埋め、夏場はほのかな冷気を考えることで、屋外は無風でも風を生むことが可能だ。

この家で暮らす家族、子どもたちも2030年には立派な大人だ。彼らが

この家で何を感じ、次の世代に何を残すのか、それには2050年をどう描くかが関わってくる。

家の中の畑は今はまだ雪の下だが、小林家の人たちの頭の中では春の種まき作業の計画が始まっている。さらに、次の年の冬には温室に野菜が育っているはずだ。

私はエネルギーや食糧の自給を殊更に主張しようとは思っていない。当たり前といえば当たり前のことなのだ。その生活自体を楽しめるような家づくりが私の目指すものなのだ。

太陽は東から昇り、西へと沈む。その営みは変わらない。その大きな営みの中で、自然とともに生きることは、そう特別なことではない。

アースシップ、どっぽ村、 若者たちをつなぐもの

今回の旅では、私自身、日本の自然の素晴らしさの再認識という、実にありきたりの結果に終わった。マイケルとの出逢いは、彼とアメリカという国

を重ねて見ることで、今という時代について私なりに結論めいたものを導き出すことができたと思っている。

様々な問題を抱える”今”であるが、本当の問題は、例えば水に対する感謝や感動、農業や建築などの仕事を通して身に付くはずの生活実感の無さではないかと思う。私はそれを仮定として、数年前に「どっぽ村」をスタートさせた。若者たちに農業と建築の両方を身につけてほしいという欲張りなプロジェクトだ。真剣に未来を見据える若者たちが大勢いる。しかし、今という時代が、彼らに夢を描きにくくさせている。それはなぜか。どうすれば夢を描けるのか。そんなことを身をもって学べる場が少なすぎる、と感じたのが開村の理由だ。

タオスの村のアースシップにも大勢の若者が集まっていた。社会の変化は政治の力だけでなく、若い世代のパワーを必要とする。しかしそれは単に集団を作り、圧力を高めるといった方法ではなく、一人一人の能力や感性の向上によって、社会の流れが変わるとい

自然体でなければならぬ。その意味においては、我々50代の人間が果たすべき役割もおのずと見えてくるのではないかと思う。

久しぶりの外国は、新しい風を私の心に運んでくれた。

春に華夏に涼風

秋に月

冬に雪あふ

足らぬものなし

清水陽介

●しみず よつすけ 1955年生まれ。
彦根工業高等学校卒業。1976年から1979年にかけて海外を自転車で放浪。帰国後、10年間の大工修行を経て、1989年から農業を始める。ワンデイ百姓（農業体験）企画等の環境活動と講演活動を行い、1996年にエコワークスを設立。

●エコワークス所在地／伊香郡余呉町
下余呉 1-873-13

TEL&FAX／0749-86123

02（携帯）090-1908-1915

いきとしいけるもの

畑 裕子



イラスト：徳永 拓美

人間にも犬や猫にも、いきとしいけるものに「生老病死」は訪れる。仏教語で人間がこの世でのがれることのできない四つの苦しみ、生まれること・老いること・病むこと・死ぬことを意味する。この言葉は自然の摂理とはいえ、時にはめいっばい抗うことの必要を痛感した。

昨年の暮れのことである。朝起きると我が家の老猫メイの様子が妙である。横たわったまま手足をまつすぐ硬直させ、痙攣させている。そのうち瞳孔が開いてきた。仰天し慌てふためいた私は固くなりつつある痩せ衰えた体を無我夢中でマッサージし始めた。何かを口走っていたようだがまったく記憶にない。

糖尿の気があり獣医さんにかかり、食事療法もしていたのだったが、「いざという時の覚悟はしておくように」と以前から宣告されていた。その時が終りにきた、との思いが脳裏をかすめたが、心のどこかで何とかなる、という気持ちもあった。電気あんかで身体を温め、

マツサージを続けた。どのくらい時間が経ったかわからなかった。気がつく
と痙攣が止まり、体に温もりが戻って
いた。老猫の生きようとする力が勝つ
たのである。

「メイは三途の川を渡ろうとしてこ
の世に泳ぎ帰ってきたのだわ」私と夫
は手放しで喜び、「よくがんばった、よ
くがんばった」と老猫に頬ずりした。
その日、一日、メイは歩くことができな
かったが、言うようにして近くの猫ト
イレで用を足した。そんな姿を見てい
ると臉が熱くなってきた。たかが猫、
と思う人もあるかもしれない。されど、
いきとしいけるもの、である。平安時
代、比叡山の高僧恵心僧都源信も生あ
るもの大切さを説いている。

翌日から老猫は歩くことが可能にな
った。歩行は無理だろうと諦めていた
私はうれしくて子供のように飛び跳ね
た。生の魅りである。老猫はどれほど私
を勇気づけてくれたことだろう。これ
には実は理由があった。老母と老猫を

一緒にするなど、不屈き千万とお叱り
を受けるかもしれないのだが。

九十一歳になろうとする母も一年近
く前、入退院を繰り返していた。その
後、小康状態を保ち、週に数回、デイ
ケアのお世話になっていく。私はいつ
からか老猫の歩く姿に老母の姿を重ね
るようになっていた。肉のそがれた臀
部から細くなった後ろ足をゆっくり動
かす仕草が母の後姿そのものである。
胸を突かれながら老猫の歩く姿をあ
て見つめる。遠く離れている母がそば
にいるような気がするのである。

毎年竹生島詣でを欠かきなかつた母
だが、今はその体力はなく、それでも元
気な声を受話器の向こうから聞かせて
くれる。ただしこちらの声は届かない。
「もう少しがんばれるかもしれない」
という母に私は大きな声で「耳の遠い
人は長生きするからまだまだがんばれ
るわよ」と言う。本人には聞こえてい
ないと思いつつ声を張り上げる。

畑裕子

●はた ゆつこ 1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年 第5回朝日新人文
学賞受賞、1994年 第14回地上文学
賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著
書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」
「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。
日本ペンクラブ会員。

徳永拓美

●とくなが ひろみ 1949年生まれ。
日本画を学び、日春展、京展、新興展、
滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「い
ぶきのやささく」(京都新聞社)、「守
山の野鳥ガイドブック」(守山市立教育
研究所)、「甲賀のむかし話」(サンラ
イス出版)、「イルカをおそった黒い波」
(汐文社)など。レイカディア大学「手
作り紙芝居講座」講師。

山暮らし子育て日記

作:オノユキ 

この冬は、よく雪が積もりました。



わが家の積雪計もみるみる埋まり...

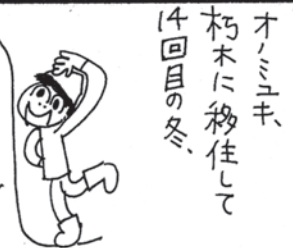


1月末には、とうとう埋まってしまっ。




アッ...

オノユキも、朽木に移住して4回目の冬。



はじめて、2mの積雪を体験。



毎日毎日、雪かきに追われ

屋根雪下ろしも行い



雪まきの日々。



2階の屋根からの集落の雪景色は、絶景

体も動かし、



充実感たっぷりです。家にいると、



赤ん坊が泣いていた。



もうやめた。うちにはオオの赤ん坊がいたのだ

お正月には首がすわり、赤ん坊(オシッコウ)をおんぶして



近所のおうちへ。



みんなはー!



おいいさん、おばあさんが迎えてくれる。

あ、入大や

まずはおじいさんが、



おい、シンクロウ。こっち見ろ。



そしてお婆あさん、へんなおじいさんがお婆あさんと思ってるわ。シンちゃん、こっちやで!



ほれ! 笑った!



おいにも笑え。おっちゃん、言えや!



シンクロウ、おじいさんにも笑ってよ... と、願うが、せううまん、いかな!



でも、おじいさんは凝りずにあやしてくれる。シンクロウ、あーん



ところで、赤ん坊のニどで家族中で困っているのがひとつあります。



それは... ウンチ色の回数が多いこと! (お食事中のみ、ゴメンナサイ!)



しかも、お風呂の湯につけると、ウンチするのだ。ゲーム



うちは、まき風呂なので、湯を汚されると、次の湯がわかまらぬ。2、3時間かかる。ウンチの花が咲く



だからシンクロウは、いまだに別風呂。



ブリブリのクセは、バケツ風呂でも続行。ブリブリ...



だから、只、姉から抗議の嵐が! 温泉に行けな-!! 行けな-!!



雪のこける頃にはこのクセもなくなるかな。



いなたか、こんなた経馬、ごせい、ませんか?

●オノミユキ(本名加藤みゆき)1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村(現高島市)に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は3人の子どもを子育て中。

「日本」について学ぼう

その五

井上 昌幸

今回も引き続き、明治維新から現在までの日本の歴史について学んでいきたいと思えます。

(四) 中国・清の崩壊

イギリスはインド産のアヘンを清に売り込み、巨利をむさぼっていました。アヘンはヘロインやコカインと同様の麻薬で、常用すると身も心もボロボロになる。

イギリスの狙いは麻薬貿易による利益と中国人の退廃でした。中国を植民地化するために、まずアヘンによって人々を退廃させ、国力を弱体化した上で、一八四〇年にアヘン戦争を仕掛け、勝利しました。そして香港を奪取しました。

アジアの強国・清がイギリスに敗北して、徳川幕府は日本の危機を痛感しました。

(五) アメリカ・ペリーの来航

アヘン戦争から約十年後の一八五三年、アメリカからペリーが軍艦四隻を

率いて浦賀に来航、幕府に開国を迫りました。初めて見る蒸気船に人々は震え上がり、「黒船」と称して恐れしました。そして「太平のねむりをさます上、喜撰^{きせん}たった四はいで夜も眠れず」という狂歌^{きやうか}がはりました。

「上喜撰^{じやうきせん}」というのは、高級茶のブランド名のことです。

ペリーの砲艦外交により、幕府は一八五四年に日米和親条約を結びました。

一八五七年には日米和親条約に基づき、タウンゼント・ハリスがアメリカ総領事として着任し、日米修好通商条約に調印しましたが、イギリス、フランス、ロシア、オランダとも同様な条約を締結しました。これらの条約は相手国の治外法権は認めるが、日本の関税自主権は認めないという不平等条約でありました。

幕府は朝廷に通商条約の勅許要請をしましたが、公卿の反対で認められず、朝廷は違勅調印を諮問する勅諭を水戸藩に伝えました。井伊直弼が大老に就任して尊王攘夷反幕の勤皇志士に対す

る安政の大獄が始まりました。そして水戸藩家老や吉田松陰、橋本佐内などが死罪となりました。

六 薩摩・長州の台頭

一八六〇年、幕府は日米和親条約のため二隻の軍艦をアメリカに派遣しました。一隻は咸臨丸で勝海舟や福沢諭吉が乗船しました。アメリカ人を驚嘆させた「サムライたちの振る舞い」を記述します。

アメリカの一般大衆が日本人を初めて見たのは一八六〇年の春でした。この年、江戸幕府は日米和親条約批准のため二隻の軍艦をアメリカに派遣します。軍艦には幕府の使節、正使の新見豊前守正興、副使の村垣淡路守範正、目付け役の小栗豊後守忠順とその随行員が乗り込んでいました。

一行がワシントンに到着したときから、日本人使節団へのアメリカ人の興味は非常に高く、行列見たさにワシントンのほかの街とその周辺の家々が空になったほど、注目を集めました。

次に使節団が訪れたニューヨークでもたくさんのお見物人が一行を迎えました。そしてワシントンでもニューヨークでも人々は日本のサムライたちの凛とした立ち居振る舞いに驚き、感動さえ覚えたといえます。品の良さ、毅然とした態度、その動作のひとつひとつにアメリカの大衆は嘆息しました。ニューヨークで一行を見たウォルトン・ホイットマンという詩人が感激のあまり、「ブロードウェイの行列」と題する詩を残しています。

馬車に寄りかかったサムライの姿をホイットマンは「超然」と表現し、「その考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目」に感動を覚えたのです。文化も違う生活環境も違う西欧の人々でも、強靱な精神力が一目見ただけでわかる。当時の武士たちには高い精神性から発せられるオーラのようなものが漂っていたのです。

私たちの祖先は素晴らしい人たちだった。もっと誇りに思っているのではないのでしょうか。

この年の三月に桜田門外の変があり、井伊大老が水戸藩士に殺害されました。尊王攘夷論が強くなり一八六一年、薩摩藩が公武合体を推進して、和宮が徳川家に降嫁しました。

蛤御門の変、長州征伐などがありましたが、一八六六年に坂本竜馬の斡旋で薩摩・長州の連合となり、尊王倒幕が動き始めました。

井上昌幸

●いのうえ まさゆき 1940年1月1日生まれ。現在、滋賀県農業種交流連合会長、STEP21滋賀県21アテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合専務理事、関西師友協会活字塾講師、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人

〈商家の家訓の話 第16回〉

野田六左衛門家の系譜と 押し込め隠居

末永 國紀



「板鼻宿絵図」(『安中市史』第2巻)

野田六左衛門家の初代金平は、蒲生郡野田村の農家の次男として享保8年(1723)に生まれた。12歳で同郡松尾山村の高井作右衛門の上野国藤岡の出店に奉公に入った。宝暦3年(1753)に31歳で別家独立し、50両を元手金にして中山道板鼻宿(現、群馬県安中市)に

碓氷川の清流を利用した造酒は、芳醇の美酒の評判を呼んだ。同郷の藤崎宗兵衛のアドヴァイスと援助もあって商運は上昇した。

47歳で没した初代は、恩人の高井作右衛門と藤崎宗兵衛に跡式の世話を頼んだ遺言を書いている。そのなかの「か茶では、妻「みち」の身の振り方について次のように述べている。

「おみち儀は、この方にてごけ立て候はば」として、婚家にとどまって後家を通すならば生計費に176両を与え、実家へ戻るならば50両を付けて帰す。どちらを選ぶにせよ、「おみち儀は心のままに成され下さるべく候」と、「みち」自身の判断にゆだねることにしている。妻への配慮の行き届いた措置である。

酒造業を開いた。出店の屋号は十一屋六左衛門である。板鼻宿は碓氷川の左岸に位置し、しばしば川留があったので、宿場町として繁昌した。本陣と脇本陣があり、旅籠や茶店が60軒余もあった。幕末には和宮も宿泊している。

二代目金平は、初代の娘「そえ」に迎えた同郷の今堀村出身の養子である。板鼻宿の代官による寛政6年(1794)の出店の商売向きについての尋問について二代目は、取扱品は造酒・荒物・雑穀であり、商いは年間5000〜6000両であると答えている。板鼻宿出店の実際の純資産はすでに2000両を超えていることは勘定帳の分析で判明しているの

で、三分の一以上の過少申告である。二代目の時代には、高崎藩や安中藩といった近隣の諸藩に貸付もおこなっているのが、外来商人としてすでに目立つ存在に なっていたのである。二代目は文化10年(1813)に65歳で没した。

二代目の子供は姉妹のみであり男子がいなかったのが、二代目の甥を養子に迎えて姉娘に添わせた。これが三代目である。姉娘は長男專太郎を生んで没したのが、三代目は妹娘を後妻に娶り、次男金治郎と娘二人を得た。

三代目の時代の大きな出来事は、板鼻宿出店の釜屋からの失火によって酒蔵を残らず焼失したことである。火災は、文政5年正月11日昼四つ時に発生した。

板鼻宿の領主は、焼失による痛手をこらうむつた三代目を本陣へ呼び出し、地元有力者の立会いのもとで、出店を再築して営業を続けるようにと慰留している。

被災をきっかけにして、野田家が出店を引き払うのではないかと危惧されているのである。このことは、野田家の板鼻宿出店がすでに地域に根を張り、地元には不可欠の存在に成長していたことを物語っている。

三代目は56歳で没する前年、文政10年(1827)に遺言を書いた。これが、明治になってから改めて家訓として制定された「家訓 家事改革秘書」である。

内容は、商家の主人としての自覚をうながす全文50か条の教戒の書である。世間の豪家や富家の盛衰は、一に主人の行状に懸かっていると見て、質素儉約による家業精励を説いている。とくに先祖から家業を受け継いだとしても、当初は借り物と思いい、主人役が立派に務まっていると傍からみなされるように努めることと述べ、誰しも最初から主人役が務まるものではないとして、努力による主人の座への到達をうながしている点が注目される。

冒頭には、私欲のために家産を蕩尽するようになる心の隙や緩みを警戒した一文を挙げている。すなわち、継承した家産は豊かにあるものと思ひ込み、どんな振舞いをしようとするかから制御されず、恐れる人もいないとの考えから油断が生じる。そうなるの家産を自分ひとりのものと勘違いして、私用のために少々減らしても家業に差し支えることもあるまいと独り合点するようになる。

そして、せっかく富家に生まれ合わせたのだから人生を楽しんで暮そうとする魂胆が気の緩みとなって古格家法を破り、没落していくことになるかと警告している。

三代目の実子である専太郎は四代目金平を継いだのが、後に父親の危惧したとおりの行状によって家産を蕩尽し、押込め隠居に処されるのである。家業を建て直したのは、弘化3年(1846)に兄の後を継ぎ、五代目金平となった金治郎である。五代目金平以降、当主は野田六左衛門を名乗るようになり、近代の隆盛を迎えた。板鼻宿出店は平成2年に閉店した。

近江商人に学べ 末永國紀

●すえながく(ことし)1943年生れ。同志社大学経済学部教授。経済学博士。(財)近江商人郷土館館長。
著書／『近代近江商人経営史論』(有斐閣)、『近江商人』(中公新書)、『近江商人入門』(サンライズ出版)、『日系力ナタ移民の社会史』(ミネルヴァ書房)

中川さんの力作 湖北の花浄土

真勝寺の内陣を飾る



セツブンソウやウラシマソウなど春の野の花



クズやツルリンドウなど秋の野の花

拙寺は、天文年間（一五三二—一五五五年）の創立と伝わる寺院である。本堂が再建されて百年目を迎えた。これを記念して内陣の欄間を新調することになった。

欄間絵は雲に天人が定番だが、あれこれ思案の末、どの寺にもないわがふるさと湖北の山野草を描いてもらうことにした。四枚の桐板の表裏に、南無阿弥陀仏のナムに因んで七六の野の花が描かれてある。

作者は、本誌で拙文の挿絵を担当していただいている中川善雄さん。中川さんの自然や山野草に対する深いまなざしがあるので、まにじみ出ている作品ばかりだ。

「草木国土悉皆成仏」

草や木にも仏性があり、悉くみな仏さまの姿。青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光と咲き競うお浄土の花のようにみんな精一杯生きてほしいと、私たちを励ます仏さまおはからの花たちばかりだ。（三山元暎記）

早春の伊吹野

三山 元暎



さし絵:中川 善雄

そろそろ日が長くなった二月の下旬になると、どことなくほっとする気分になる。もちろん、まだ雪の中であつたり、厳しい寒さの日が続いても、春が間近にやってきたというひそかな喜びが沸々とわらう。

日中の陽ざしが強く、白装束であつた伊吹山もどんどん雪が解け、まだら模様になつてきた。姉川

では、奥伊吹からの雪解け水が軽快なひびきを奏で、堰で砕けた水は白く光り、春の舞を演じている。

この川べりで、いちはやく呱呱の声をあげるのがネコヤナギだ。ふつくりした銀色の花穂が、陽と水の光に融け合い輝く。このネコヤナギと時

を同じくして、川の土手の顔を出すのがフキノトウ。ネコヤナギ同様、雌雄別々で、雌株の方がふつくりと丸味を帯びている。雄株の方はやせていて細長い。詩歌に詠まれるだけでなく、食用になる。朝餈の味噌汁に浮かせること、ホロ苦い味が口いっぱいに広がって、春到来という実感がわいてくる。

昨日摘みつくせしは、この路の臺 森井美知代

谷あいの残雪の上にはひっそり咲くマンサクの花を見つけると、「春が来た」と思わず声をあげたくなる。雪にも負けず、寒さにも負けずに咲く姿はけなげだ。きつと、昔の里人は、この花のつきようを見て、「今年は豊作に違いない」と思ったことだろう。

でも、マンサクという名は豊年満作に由来するのではな

く、「まず咲く」というのがなまってマンサクになったのだという。名の由来はともあれ、常に自然の移りかわりに反応して、それを日々の暮らしの中で生かされ生きる幸せと結び付けて考える心情は美しい。

まごさくのぬくもじほひで
なごしのの 直江裕子

三山 元暎

●みやま もとあき 1940年滋賀県坂田郡山東町(現・米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にもない退任。真宗大谷派真勝寺前任職。

●なかがわ よしお 1936年生まれ。滋賀県展・長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞。入選歴多数あり。税理士。



高宮の宿駅「座・楽庵」店頭

環人会ツアーVol.15

彦根市 高宮町・石寺町・日夏町

- ◆日 時 / 1月29日(土)13:00~17:00
- ◆場 所 / 高宮 宿駅 座・楽庵 おとくら喫茶
石寺 エコ民家
日夏 旧日夏村役場
- ◆参 加 / 鶴飼准教授、辻村理事長、梶、田代、膽吹、高田、
西村、中塚、富永、辻村(写真記録)10名
- ◆幹 事 / 富永千弘
- ◆主 催 / NPO法人コミュニティ・アーキテクトネットワーク
<環人ネット>



パンフレット

「環人会ツアー」は主催者がNPO法人環人ネットとなりました。今回は県立大学と、近江環人・地域再生学座がかかりを持って活動している地域、なかでも県立大学近郊の集落（高宮、石寺、日夏）で、特に光彩を放つ活動に着目し企画されたツアーです。

当地は、環人ネットがNPOとして活動する舞台となる地です。私たちは、地元の現状について、足を運び、会話し、成功している事例を学び、当NPO各事業活動への拡がりを期待したものです。

○高宮町 宿駅 楽庵 喫茶おとくら

中山道の宿場町の面影が残る彦根市高宮町。石造りの多賀大社一ノ鳥居のすぐ近く、街道沿いの江戸期に作られた歴史ある商家を、県立大学の学生グループ「おとくらプロジェクト」が誰でも気軽に立ち寄れるコミュニティスペースへと甦らせました。「宿駅 楽庵 喫茶おとくら」は、学生たちによって運営されています。

① 倉を改造した喫茶スペース ② 喫茶おとくらの店内 ③ ギャラリーも開放的 ④ 美味しい珈琲をいれてくれる2回生の石井さんと3回生の服部さん





① 石寺エコ民家3号館 ② 石寺エコ民家1号館の台所薪ストーブで暖をとる ③ 試作品の薪ストーブ ④ 3号館の2階
⑤ 1号館の2階はシアタースペース

かつて商家であった内部空間は、作家の作品が展示されているギャラリー、古い調度品ならぶ喫茶スペースへと改装されています。カフェの奥には土蔵への入り口があり、蔵の内部は、吹抜け空間を利用して適度な残響のあるライブスペースになっています。

私たちは、学生たち(県立大生服部さん、石井さん)による、美味しいコーヒーとケーキのセットを頂き、古くて新しい空間をしばし楽しみました。来客された地元の方からは、地域の昔の様子を伺い、現在は、交流の場・おとくらが地元の

方に愛されていることを知りました。

○石寺町 エコ民家

滋賀県立大学環境科学部 鵜飼研究室が、集落内の空き家となった古民家を、環境負荷の少ないバイオマスを積極的に利活用した「エコ民家」へと、次々に改修を進めています。「エコ民家」へ入居希望の学生が多く、新たに三つ目のシェアハウスを確保するため、現在、NPO法人環人ネットが、空き民家改修のサポートをしています。今回は、既に工事が完了している居住空間(居間、厨房、学生部屋)を視察しました。居間では、薪ストーブのデータ収集が行われており、入居した学生が、室温と外気温、投入する薪の炭素量の計測を担当しています。お風呂や洗面・流しのための湯沸し用薪ボイラーが設置されているのは、既存の「エコ民家」と同様です。

引き続き、母屋の改修を計画しており、地域の住人が気軽に立ち寄れる場所を目指しています。



旧日夏村役場

当時の建築図面



○日夏町 旧日夏村役場

ツアーの最後に、日夏町の朝鮮人街道沿いにある近代建築、旧日夏村役場（昭和10年竣工）を訪問しました。旧日夏村役場は、近江環人、地域再生学座七期生の荒木さん、又吉さんが発表されたコミュニケーション・プロジェクト実習の内容で確認していたものの、建築家W・M・ヴォーリスによる設計であるという事実に、たいへん興味を覚えました。また、地域の有識者自らによる保存・再生・活用への取り組みに感動し、畏敬の念を抱きました。

建物内部は、空間の構成、優しい階段、丁寧なディテールなどから、明らかにヴォーリス建築であることがうかがえます。特に現役学座生の実習成果により、一粒社ヴォーリス建築事務所に保存されていた当時の建築図面が発見され、また、鵜飼先生が大広間の天井裏から当時の棟札を確認できたことなど、今後の保存再生に役立つ資料が揃いつつあります。今回のような、伝統的価値のある建築物の保存再生利活用について、今後、NPO法人環人ネットがサポートできるような態勢を整え、地域コミュニケーションの要望に応えていけるようになればと思います。

本ツアーの開催が、年明けの多忙な時期で、県内の各地のイベントとも重なりましたが、参加者と共に事故も無く、無事に閉会することができました。私たちが快く受入れて頂いた訪問先の関係者の皆様にお礼を申し上げます。

2008年に滋賀県近江八幡市にあるボーダレス・アートミュージアムNO-MAとスイスローザンヌ市のアール・ブリュット・コレクション(Collection de l'Art Brut)との企画展「JAPON」をきっかけにして、フランス・パリ市立アール・サン・ピエール(HALLE SAINT PIERRE)美術館の館長自らが、2009年滋賀県社会福祉事業団を訪れ、自身の目で選び抜いた作品(63人、約800点)が芸術の都パリを彩った。



知事の方たちに作品を紹介



西川智之「うさぎのりんご」1993年

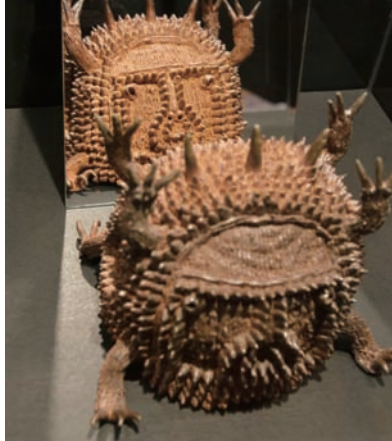


アール・ブリュット

ART BRUT JAPONAIS
アール・ブリュット・ジャポネ凱旋展
～パリに行った作家たち～

2月1日～6日、大津プリンスホテルで
アール・ブリュット・ジャポネ展が開催された。
主催は滋賀県社会福祉事業団企画事業部
(ボーダレスアートミュージアムNO-MA)

アール・ブリュットとは伝統や流行、教育などに左右されず、自身のうちがわから沸き上がる衝動のままに表現した芸術、加工されていない(生)の芸術。英語では「アウトサイダー・アート」と称される。フランスの画家ジャン・デュビュッフエ(Jean Dubuffet 1901-1985)によって考案された概念。



澤田真一「無題」2006～2007年

今 回のアール・ブリュット・ジャポネ凱旋展は、フランスのアル・サン・ピエール美術館の雰囲気を感じ、しょうがいをもつ作者の表現を、間近に味わってもらおうというもの。

佐々木早苗
「無題」
2007～2008年



ブ ツブツの集合体の陶芸を見たとき、鳥肌がたった(ブツブツに弱いだけかもしれない)。

奇妙な感覚、文字、記号、絵画、表現されてる何れもが、現実をきりとっている。美しい部分だけとか、見にくいところは取り去ってとか、いわゆる大人の配慮はない。口当たりが苦かろうが、甘かろうが、目にした全てを感覚のママに表現している。

彼らの作品には、共通している感覚がある(と、思う)。それは『熱』だ。かつて、火焰土器や縄文土器を見たときの感覚に似ている。古代の祖先が残した火焰土器は『熱さ』を感じた。

なんだろう？ 思考ではなく、理性でもない。“自然のまま”が、そこには溢れている。自分の殻が、ひび割れる感覚に陥った。



会場風景。右の作品は石野敬祐「女の子」2009年



兵庫・佐賀・長野・岩手の各知事を招いてのトーク

知 事セッション「アール・ブリュットの魅力を伝えよう」嘉田知事がコーディネーターとなって各県の取り組みを伝える。

講演日記

皆様のご支援でたくさん
の講演依頼を頂きました。
2011年1月～3月の講演を
ダイジェスト版でお知らせ
します。

● 第22回執筆者懇談会
日時：平成23年1月28日

- 主催：弊誌
- 対象：執筆者
- 目的：編集会議
- 会場：安兵衛
- 参加：13名

● 1・2・3フォーラム
寄付でつくる地域の
未来



写真はびわ湖大緑日のヒトコマ



びわ湖大緑日で未来予想図づくり

● 日時：1月23日
● 主催：びわ湖ホール・淡
海ネットワークセンター
● 会場：びわ湖ホール
● 内容：出版

● 低炭素都市推進国際
会議 in 京都

- 日時：2月11日
- 主催：低炭素都市推進
協議会
- 対象：米国、ドイツ、ス
ウェーデン、市民活動
団体の関係者
- 内容：講演
- 会場：国立京都国際会
館
- 演題：「低炭素時代の
実現に向け」何を豊か

な社会とするか価値感
の变革
● 講師：内藤正明京都大
学名誉教授

● アグリモーニング
セミナー2



- 日時：2月13日
- 主催：ブルーベリーフー
ルズ紀伊國屋
- 対象：希望者
- 内容：パネルディスカッ
ション
- 会場：成安造形大学内
カフェテリア 結紀伊國屋
- 演題：消費者にとつて
TTPとは？農業政策
と補助金
- パネリスト：松本茂夫

● 石津大輔、池田喜久子、
辻村琴美
● 参加：20名

● 園内研究会

- 日時：2月16日
- 主催：草津市立笠縫幼
稚園
- 場所：草津市立笠縫幼
稚園
- テーマ：手紙等作成に
かかる効果的な表現の
仕方について
- 講師：辻村琴美
- 参加：6名

● JAレック伊吹
レディーススクール

- 日時：2月19日
- 主催：JAレック伊吹
- テーマ：節約の話
- 会場：JAレック伊吹
本店
- 演題：エコな節約生活
が地域づくりにつながる
- 講師：辻村琴美
- 参加：80名

● 新九州64期
方針発表会

- 日時：3月12日

● 主催：新九州(株)
● 会場：長浜ロイヤルホ
テル

● 演題：激励の言葉
● 講師：森建司

● 生き方を学ぶ講演会

- 日時：3月14日
- 主催：滋賀県立彦根翔
陽高等学校
- 会場：視聴覚兼多目的
教室
- 演題：自分らしく、
失敗だらけの人生つ
て？
- 講師：辻村琴美
- 参加：200名

● 静岡県中小企業経営
フォーラム

- 日時：3月23日
- 主催：法政大学大学院
政策創造研究科、静岡
県中小企業経営革新
フォーラム21
- 会場：浜松アクトシテ
ィー「コングレックスセ
ンター」
- 演題：人を大切にする
経営道
- 講師：森建司

本の紹介

BOOKS

最近入手した、気になる本・CD・DVDをご紹介します。

もくもくうしです！



文／うしのえほんをつくる
かい

絵／とく はるあき

発行／「浪速部落の歴史」
編集委員会

発売／解放出版社

価格／1200円＋税

内容／牛は、鳴き声以外すべてで生き物の「いのち」の大切さを、子どもたちと一緒に考えてみませんか。牛からできる人間にとつての必需品の数々が私たちに訴えかける。イラストの力を感ずる絵本。

深刻化する土壌汚染



編者／畑 明郎

発行／世界思想社

価格／2000円＋税

内容／土壌浄化への提言！
土壌汚染をめぐる問題が全国で多発している。編集者たちが直接関わった、市街地、農用地、アメリカ、中国の土壌汚染の実態を検討し問題解決を提言。

食の歴史と日本人



「もったいないはなぜ生まれたか」

著者／川島博之

発行／東洋経済新報社

価格／1800円＋税

内容／環境・産業大国の原
点は「食文化」にあった！
「勤勉」「もったいない」など日本精神の誕生を東京大
学院准教授の著者が、「食」

の視点から解き明かす。

信念が未来をひらく



稲盛和夫の経営哲学に学ぶ

著者／伊藤幸男

発行／致知出版社

価格／1600円＋税

内容／稲盛和夫氏推薦の書。
名古屋経済大学教授の著者が稲盛氏の経営哲学を多くの事例を用いて解説。

月刊資源環境対策1月号



発行／環境コミュニケーションズ

価格／1700円

内容／特集「持続可能な社会の実現をめざして」。弊誌代表の森建司が寄稿した「持続可能な社会は誰がつくるのか」を掲載。環境文明21の加藤三郎氏の寄稿も。

アートはボーダレス

Borderless Art Collection



発行／日本財団

価格／1000円

内容／第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会記念図録集。全国のアール・ブリュットを紹介している。

近江湖(うみ)物語四

琵琶湖を制する者



発行／滋賀県教育委員会文化財保護課

内容／耕す農・漕ぐ舟・通る(道)・架ける(橋)・戦う(乱)・制する(治山治水)。

滋賀県近江の成り立ちを、独自の切り口で紹介。歴史と文化財を統合した解説書。写真が豊富。

M・O・H
せんりゅうM・O・Hせんりゅう2011
第5回ベスト11

もったいない・おかげさま・ほどほどに、をせんりゅうに織り込んで
いただく、「M・O・Hせんりゅう」が5回目を迎えました。
応募総数71句から11句に(執筆者懇談会にて選定)絞られました。
この中から、ベスト3を選んでいただきます。ご協力ください。



「わが畑(はた)で とれた野菜で 幸せ朝食」
「買いたいと 思う心に 問い直す」
「もう(M・O・H) いいよ 無駄な生活 ほどほどに」
「My Life すべて自然の おかげさま」
「考えよ 少しの我慢 未来の一步」
「もったいない お菓子一つに レジ袋」
「もったいない 実践しなきゃ 意味がない」
「ほどほどに 流行追っても 癒しなし」
「婆さまの 勿体ないが 我が癖に」
「もったいない 物の生命のしまいまで」
「良い品を 使えば結局 安上がり」



「びわこみみの里」を取材した折りに、「手話」を教えてくださいました。
言葉を伝える美しい表現方法です。野田さんと岡田さんに「私の
大切な物」を教えてくださいました。

手話
コーナー「料理」
です。野田 康子(のだやすこ)さん(55)
粟東市

「中学生のころから料理が好きです。今は主婦なので、美味しく作ることができます。」

「友達」
です。岡田 昌也(おかだまさや)さん(44)
草津市

「私は独身なので、今は友達がとても大事です。」

いいもの
みつけた

子どもが輝く教育のまち・家庭のカレンダー

- 製作／草津市教育委員会
- 仕様／A5サイズ、16ページ、カラー
- 標語／松原学区教育総合推進会議「生活ひめくり」、草津学区子ども輝き人権教育推進会議「生活カレンダー」、情報通信における安心安全推進協議会「平成21年度情報通信の安心安全な利用のための標語」(後援:総務省)の受賞作
- 絵手紙／絵手紙サークル「ほのぼの会」
- 内容／一日一言絵手紙とともに。わかっちゃいるけど忘れがちな一言がうれしい。毎日代わる絵も楽しい。
- 提供／笠縫幼稚園



点字紙を再利用したパッケージの紅茶



- 紅茶のお店「京都紅茶倶楽部」。芸妓・舞妓さんの行きつけの店。点字用紙をお洒落なパッケージに再利用。

<http://www.kyotokouchaclub.net/>

<http://www.kyotonp.co.jp/top/article/20101026000100>

観音さんがおこしくさいました

こんなにありがたいことがあってもいいのだろうか？ 仏像を彫っていただいたことは、生まれてはじめて…。

弊誌に「観音さん」が仲間入りされました。思わず手を合わせます。

木彫一筋50年。丹生の彫刻家・森哲荘師の作です。お姿を拝していると言葉はいりません。

哲荘師、ありがとうございます。



作者／森 哲荘
(滋賀県米原市)

材質／松

手法／木彫り

寸法／33×7.5×7.5cm

説明／頭部に化仏(けぶつ・衆生を済度するために出現された如来の仮姿)を冠し、手を組み微笑かける様子を、大胆な一刀彫で仕上げている。柔和でおおらかな佇まいが漂う。

平成23年2月22日

観音さん

「アートと社会」

鷲田清一大阪大学総長講演

- タイトル／「文化で滋賀を元気に! 文化・経済フォーラム滋賀」
- 日時／平成23年2月11日
場所／ビアンカ船内
- 主催／文化・経済フォーラム滋賀
- 基調講演／大阪大学総長鷲田清一氏が「アートと社会」をテーマに講演
- 内容／フォローシップで市民が主役ホンの50年前は住民が主人公(主体)。病気になるると薬草を煎じ、死ぬと家族と地域の住民が埋葬し、悩みごとは長老が解決。住民は自分たちで難題を解決していた



現在の住民は第三者(受身)
病気になるると病院にかけこみ、死ぬと葬儀社がすべてを行い、もめると弁護士が駆けつける。住民は、誰かにモンクをいうことが務めと感じモンスターペアレントとも呼ばれることも



価値観は多様になり、目線も違ってきた、問題も各人ちがう。そのような集団が必要なのは、強いリーダーではなく、リーダーを支えるフォローシップ。リーダーは交代しても、支えるフォロワーがいれば、ことは動く。今、私たちに必要なことは、自分でできることを実行する、共通の目標がなくてもつながり合える社会。それには、アートがぴったり。自己表現は様々で、作業をでき、一体感を実感できる。リーダーをフォローして行くマインドが欲しい。

加藤登紀子報告会



- タイトル／国連環境計画(UNEP)加藤登紀子親善大使 海外視察報告会
- 日時／2月7日
- 場所／大津プリンスホテル
- 主催／環境省・GEC
- 特別協力／滋賀県・大阪市・UNEP、IETC・大阪市中央図書館
- 内容／歌手の加藤登紀子さんが2000年10月にUNEP親善大使に任命されて以来アジア・太平洋地域の環境保全活動の現場を訪れ、カメラでとらえ、音楽で交流を重ねた。その模様と、美しい歌声を聞かせてくれた。
- トークショー／加藤登紀子さん、嘉田由紀子滋賀県知事、松井三郎氏(京都大学名誉教授)

新座市から2030ビジョンが始まる

- タイトル／2030年ビジョン
- 場所／新座市
- 担当／中山弘
- 内容／中山さんをはじめとする、志ある20数名の仲間が自分の欲する社会像を見つけようというもの。彼らのめざす社会は、かつてM・O・H通信で紹介した2030滋賀モデルと同じポリシーを持つ。
- 原案検討会
 1. 「どんな社会を目指すか」
 2. 「2030年の生活はどうありたいか」

NPO法人キーパーソン21 10周年記念 「大学生のキャリア教育を考える会」 —学生の活躍の軌跡から—

- ◆日時:2011年3月19日(土) 13:00～
(12:30受付開始)
 - ◆会場:日本マイクロソフト株式会社 品川本社 31階セミナールーム
(<http://www.microsoft.com/japan/mscorp/branch/sgt.mspx>)
〒108-0075 東京都港区港南 2-16-3
品川グランドセントラルタワー (JR品川駅港南口より直結 徒歩3分/京浜急行品川駅より徒歩6分)
 - ◆定員:100名
 - ◆主催:NPO法人キーパーソン21
 - ◆後援:川崎商工会議所
 - ◆協力:日本マイクロソフト株式会社
 - ◆プログラム
- [1部 シンポジウム (13:00～14:00)]
1. 基調講演「小学生から大学生までキーパーソン21のキャリア教育の仕組み」
NPO法人キーパーソン21代表理事
朝山あつこ
 2. パネルディスカッション
「大学生に必要なキャリア教育とは？」

パネリスト:小坂橋孝雄(自由が丘産能短期大学キャリア支援センター)、津賀史紀(株式会社リクルートエージェント)、高橋美智恵(キャリアカウンセラー・東海大学非常勤講師)、松本智春(川崎市立川崎高校定時制教員)
コーディネーター:池照 佳代(有限会社アイズプラス代表・キーパーソン21理事)

[2部 キーパーソン21学生会員によるプレゼンテーション (14:20～16:40)]

1. 学生会員による成果発表
2. 大学4年生 社会への旅立ちの決意表明

[3部 4年生を社会へ送り出すお祝いの会 (17:00～19:00)] (軽食※参加費:大人3,000円/学生2,000円)

- ◆申し込み:info@keyperson21.org (担当:林章子)宛
- ◆連絡先:NPO法人キーパーソン21
TEL044-431-0420、FAX044-431-0421
info@keyperson21.org

KIESS土曜倶楽部 二宮尊徳の実践から継承するもの

- ◆開催日時:平成23年3月19日(土) 午後2時～4時
- ◆開催場所:KIESS町屋事務所 (川端通り二王門東入る最初の角)
〒606-8386 京都市左京区新丸太町43
TEL&FAX075-752-1133
- ◆話題提供
講師/中桐万里子氏(親子をつなぐ

学びのスペース リレイト代表、関西学院大学講師、尊徳翁の7代目ご子孫)

演題/「二宮尊徳の実践から継承するもの」

- ◆参加費:KIESS会員500円、非会員1000円

「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」の発行に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」を発行する。

《 M・O・H通信概要 》

■目的

- (1) 循環型社会構築に向けた意識改革
- (2) 浪費型社会通念の脱却
- (3) 人生哲学を学ぶ

■事業

- (1) 通信の発行及び出版
- (2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111

滋賀県長浜市

川道町759-3

循環型社会システム研究所

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

e-mail:tsujimura@

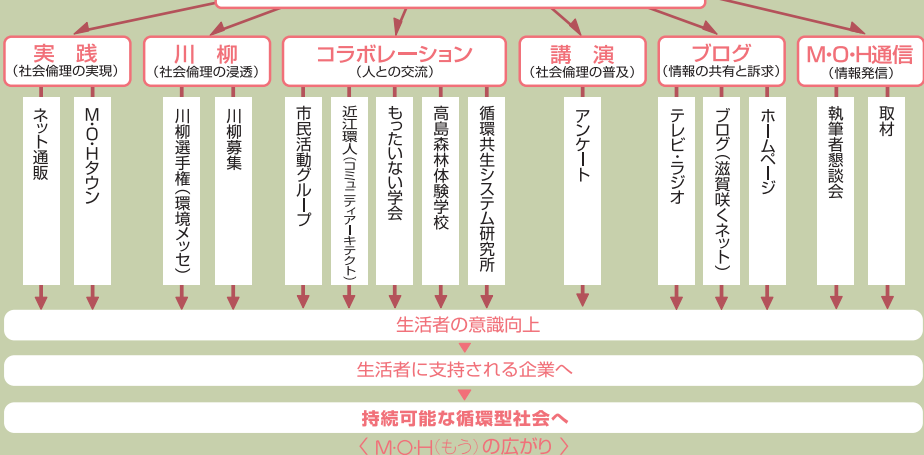
shingoshu.co.jp

代表:森 建司

担当:つじむら ことみ

[M・O・Hコンセプトシート]

M・O・H=循環型社会をめざす言葉
(もったいない・おかげさま・ほどほどに)



読者の声

★ たまたま近くで開かれる「アグリリーディングセミナー」に参加し貴社発行の小冊子を読みました。久しぶりに新鮮な発言をたくさん読ませていただきうれい気持ちになりました。こんな人たち（女性の多いのにびっくり）がこんな仕事を自ら作り、取り組んでいることには非常に驚きです。しばらくM・O・Hを読ませてみてください。

大津市 甲斐千恵

★ 私は医療の立場からですが皆様方とともに明るい将来社会を創りたいと願っております。おかげさまで成人病センターに新棟建築のコーサインが生まれ、国レベルのプロジェクトが滋賀県で進む予定です。皆様によりよくお伝えください。

滋賀県立成人病センター総長 笹田 昌孝

★ 「こはの아트工塾」というアナウンズ塾をスタートさせました。FMの方も若干おくれ気味ながら免許申請作業を続けております。お近くにこれらたらお立寄りください。

大津市京町かんきビル 豊田 一美

★ 期待・希望・行動したい冊子

東近江市 小島信雄

★ 経済は「経世済民」民を助け（救い）世を治めるの意。今は一金（せに）儲け

の意味に使われている。ここに重大な問題を含んでいるのではないか？M・O・Hは本来の経済の原点を思い。感動しました。

高島市 和田至博

★ 二代目塚本定右衛門の格言、経営は生き物・近江商人に学べ。幼児のエコロジ。この記事もたいへん感動しました。読むのが楽しみです。

栗東市 藤橋正和

★ 大津市某所でいただきました。いつも楽しみにしています。読み応え見応えたっぷりの滋賀発無料配布誌。今回の特集「絆」町づくり」にびわこみみの里さんが、これから読ませてもらいます。

京都市 加藤わこ

★ 私は循環型の産業が大切であること日本の農業のチャレンジが大きな課題であると思います。事業承継学会ではありがとつございまして。

大阪市 プレミアリアル生命保険 白崎強史

★ 「生かされている」となかなか感じられない自分

米原市 堀江紀子

★ 会員の方から、「こうした小冊子が以外に少ないのでとてもうれい」と毎号喜んで読まれています。発会以来17年。だんだん「年が高くなるにつれ登る山が低くなり」。平地の見学・体験を加えています。

京都市 湖周山遊会 長宗清司

編集後記

会社を社会に貢献する事業として存続・発展させるには…。坂本先生に教わりました「人」と「愛情」。身近にあって、気がつかないことが重要なんですね。自分のことしか考えていない、私にとっては耳のいたいことです。

農業って、難しいんですね。作るのも、税制も政策も…。わかりやすく、美味しい紹介の仕方はないかな？と探っていると、motoko さんに出会いました。アート&農&若者と大阪の合体です。農が身近な存在であることをアピールできれば…。

地産地消で作っている方を、応援したいと願っていました。湖国の里山さんと、木野環境さんという力強いパートナーと巡り合い、「カタログ」が実現しました。誌面で販売のお手伝いができるなんて、光栄です。

ホルスタイン ことみ

《次号予定》

2011年6月発行予定

■特集：文化【過去・現在・未来】

- 鼎 談／「作家の目線」芥川賞作家高城修三
+児童文学・今関信子+森建司
 - 取 材／おかえりなさい「仏様の里帰る」
 - 取 材／無農薬のしいたけつくりを命をかける
「しいたけぶらざ〜ず」
 - 寄 稿／「天性の芸術家達に魅せられて」
藤本えりか
 - レポート／環人会現場研修会16
 - コラム／①国際ナショナルメッセージ
 - 連載／通常通り
- ※ 敬称略、予告なく変更いたします

《M・O・H通信》受付中!

あなたも「M・O・H通信」を読んでみませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。あなたの活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

お名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、

《M・O・H通信》申込書

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住所	〒		
電話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のごことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M・O・H通信 Vol.31 (通巻32号) 2011年3月20日発行 発行部数6,000部


●編集・発行/新江州(株)
循環型社会システム研究所
M・O・H通信編集局
代表 森建司
編集長 つじむらことみ
編集協力 稲垣重雄
取材 細井美保
荒木美晴
デザイン 伊達デザイン室
写真 辻村写真事務所
印刷 ブランセル
ホームページ ブランセル
ブログ 滋賀・咲くブログ

●執筆者懇談会
内藤 正明 畑 裕子
海東 英和 堤 幸一
山田 朝夫 進 ひろこ
下西 康嗣 中村 誠
末永 國紀 笹山 千伶
花田 真理子 結城 美枝子
弘中 史子 松崎 和弘
今関 信子 井上 昌幸
山崎 隆 辻村 耕司
三山 元暎 佐々木 洋一
加藤 みゆき 徳永 拓美
清水 安治 山口 美知子
檀上 俊雄 岡部 達平
森 孝之 豊田 一美
(順不同・敬称略)

●ご協力
滋賀県 NPO法人環人ネット
琵琶湖環境科学研究所 近江環人地域再生学座
センター もったいない学会
循環共生社会S研究所 野洲生活学校
高島森林体験学校 EEネット
麻生里山センター 中小企業家同友会
(順不同)

●支援
新江州(株)
〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8681
★ブログ 滋賀・咲くブログ★
<http://moh.shiga-saku.net/>
★ホームページ★
<http://www.mohmoh.jp/>

MOH図書館

で検索 

※記事中の写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。